1 月 5 日

「新しい年代へ」

ヨハネ 1:1

武安　宏樹　牧師

本節は「はじめに神が天と地を創造された」(創 1:1)をモチーフとしながら、天地創造よりはるか前から、ことばなるキリストの存在を前提としています。本書は実況中継的なマタイ＆マルコ＆ルカの三福音書と異なり、老ヨハネが異端との戦いのため神学的＆伝道的目的で編纂した、いわばイエス証言集で、ある学者は「霊的な」福音書と称します。背景には御子の神性への攻撃に加え、父から派生ゆえに下位とか、4 世紀に至るキリスト論争の端緒となりました。2010 年代はマルコ、2020 年代はヨハネと福音書講解で幕を開けた次第ですが、当教会においては「新しい年代」への信仰継承＆教会形成の必要も覚えます。本書の強調点は父＆御子、そして御子にあって兄姉が「一つ」であることです。

「ことばは神とともに」永遠の昔から御子が神と離れず、至上の信頼関係と、互いを知って愛も能力も共有する豊かな交わりで、私たちにも聖霊によって、教会の交わりの中で賜物と関わりの相違はあれど、賦与されているものです。永遠なる方を知るためには、神と人と「ともに」生きること以外にありません。あえて違う年代や価値観の人々と交わると、砕かれながら器が広げられます。「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに」(3:16)世と罪人を愛する主の愛が身に沁みます。神と人との信頼関係に応じて私たちは成長するので、個人的にも教会的にも恵みは尽きませんが、本質は一朝一夕に変わりません。逆境に思えても砕かれて祈りと御言葉に求めれば、静かでも大きな恵みです。

「ことばは神であった」前者は存在や人格を表し、こちらは性質を表します。神性とは目に見えない霊なる方、完全な知性＆能力＆愛＆義＆計画などです。神は旧約時代から「ことば」で、律法や預言といった手段を通して語りました。けれども御子は以上と同列ではなく集大成、キリスト御自身が「ことば」です。人と「ともに」生きるだけでなく、私たちと同じ姿になられた神のことばです。 たしかに恵みは徐々に浸透しますが、神のことばは語ることやふるまいから、 取り次ぐこと自体に聖霊が働きます。私たち自身メッセンジャーだからです。 M･テニイは本節を「永遠＆人格＆本質」と定義します。私たちはこの 3 つに、どれほど近づけるでしょうか。御子の肢体の交わりから新年代を展望します。

1 月 12 日

「恵みを無駄にしない」

Ⅱコリント 6:1～2
岡本　真紀　師

パウロは神様の恵みを無駄に受けないようにと勧めています。無駄ということばは中身がなくなってしまうことです。神様の恵みを無視することで恵みの中身が無駄になってしまいます。

私たちは神様の真実・恵みを伝える ことによって義の栄光が用意されています（II テモテ 4:8)。そしてイエス様は祈りについても教えて下さっています（マタイ 6:9-13)。しかし、私たちは忙しくて祈れない。祈りがわからないと思っていませんか？他にも高齢化・経済不足の対策が必要とか、自分の体調、仕事などが解決されていないといった理由によって恵みを無駄なものにしていないでしょうか。
神様は私たちに備わっている物を使って、働きを託しています。それゆえ、自分は伝道が出来ないという理由にはなりません。

今は恵みの時、今が救いの時と言われています。私たちは神様から多くの恵みを受け取っています。そのような背景のもとにこの言葉は語られています。まさに今が救いの時です。私たちはどこでも、誰にでも、いつでも証しできる人であるために、3、5、10 分の準備が必要とされています。あなたはいつでも、誰にでも証しできますか？
魂の救いのために最後に泣いたのはいつですか？神様は救いのために何をしましたかと問われています。魂のために重荷をもっていますか？
主の働きには色々なものがあります。神様はひとりひとりにその働きを示されています。

1 月 19 日

「いのちの光」

ヨハネ 1:1～5

武安　宏樹　牧師

本日の箇所はあまりに有名ですが、キリストの在り方を総括しています。「初めに」「ともに」「いのち」「光」などフレーズを循環させながら賛美しつつ、御子の神性や一体性に疑義をはさむ悪しき軍勢に、ヨハネは立ち向かいつつ、一人でも真理の道を誤らず、終わりの日にさばかれないように願っています。注目すべきは動詞に四つの時制(現在/未完了過去/不定過去/完了)が使われ、ヨハネは時間と永遠性、光と闇のコントラストを、読者へと訴えています。

「あった」「あった」「あった」「おられた」「あった」「あった」(１～２，４節)で、６回登場する英語でいうところの be 動詞ですが、いずれも未完了過去時制で、過去に現在進行形で継続した状態(終わっているかは問わず)を意味します。人類でそんな者はいません。人生は鉄道のように始点と終点があるからです。キリストは 100%神＆100 人の「二性一人格」ですから、私たちと同じでもあり、神的な見方をすれば違う方です。しかし世間は「ヨセフの子」「大工」などと、目に見える血筋で捉えたがります。されど時間の概念は人間のためのもので、悠久に見える 2000 年の歳月さえ、永遠の神から見れば豆粒ほどの期間です。私たちが神に近づく以前に、永遠の神が有限の人の形で愛をもって突入した。「わたしはある」(出 3:14)神は、人間の神学では定義しつくせない御方です。このキリスト理解に立つ時に、私たちは自己認識の根本的修正を迫られます。

「造られた」(３節)の不定過去時制は、過去の出来事一回限りで完結の意で、創造の御業が６日間で、キリストにあって完成したことを表します(創 1:31)。全ての生態系もわれわれ人間も最高傑作。出来損いだから努力せよではなく、後に堕落による毀損はするけれども、出来は「非常によかった」完成品でした。ここで３つ目の時制「できた」は完了形は、過去の状態が現在に至り継続中で、「今なお存在しているもの」の意。被造物もキリストの権威も終わっていない。自然や歴史や人間の表面的には不義が蔓延するようで、深い部分にいのちの胎動を感じます。最後に４つ目の時制「輝いている」は現在形で今も継続中の、「シャイニング」です。一方で「打ち勝たなかった」は不定過去で完結ですから、十字架上の御業「完了した」(19:30)をもって、敵の息を止めたという意です。私たちに臨在するいのちの光を、隣人に訪れようとする救いを知りましょう。

1 月 26 日

「光について証しする」

ヨハネ 1:6～8

武安　宏樹　牧師

バプテスマのヨハネの生涯については、母エリサベツの老女出産と直後のマリヤによる処女降誕とが比較されながら(ﾙｶ 1:)、主イエスの先を歩きつつ、横綱土俵入りの露払いの役目で、神のことばを伝えることに終始しています。「私よりも力のある方で～履き物を脱がせて差し上げる資格も」(ﾏﾀ 3:11)無いと証言していることから、公生涯の前からきわめて具体的に主を知っており、あくまで私見ですが、エリヤとして召天しヨハネとして産み落とされるまで、三位一体の神と御使いも含めた世界救済会議を、拝聴していたのではないか。「神から遣わされた一人の人」(６節)は、「神であった」主イエスと対照されて、彼の使命を明記しています。エリヤ説を否んだのも分際を弁える故でしょう。

ここに最高の証し人の姿があります。知識＆体験で深く知るにも拘わらず、自分を誇らずただキリストの真実を伝えて、全てを捧げようとする人です。私たちから見れば雲の上の人ですが、証しは救われて間もない人であっても、知識や経験が乏しくとも、熱心に証しをするところに救いの門が開かれます。一方で全て備わっても十分ではなく、聖霊の働きに期待しながら種を蒔くと、期せずして実を結ぶ。もちろん日々の研鑽の必要は言うまでもありません。それはそれとして初心者でも出来るけれども、恐ろしく奥が深いのが証しで、研鑽に比例して実を結べば楽ですが、それだと祈りと伝道の手が止まります。

ヨハネは自分が何者で自分に与えられた目的が何かを知っており、研鑽や試行錯誤も重ねたでしょうが、愚直なまでに証し者としての生き様を貫いて、遂には恐ろしい権力者を前にしても罪を指摘して、堂々と首をはねられた。死に至るまで主イエスの道備えをしたのは、いのちの光を知っていたからで、太陽光を反射する月のような存在と、確信していたからではないでしょうか。そのフィルターを切断しようとした悪魔は、逆効果でかえって光が炎上して、十字架での対決へと追いやられたのです。だから彼は導火線の役割を果した。諸宗教で智慧＆慈悲を得ると「光明を得る」と言われます。人は光を求めます。けれども中途半端に悟ると高慢と罪が待っています。光の源は主イエスです。私たちは反射板で十分との確信が、闇に打ち勝つ人生へと必然的に導きます。

2 月 2 日

「神の子どもとなる特権」

ヨハネ 1:9～13

武安　宏樹　牧師

12 節は個人伝道でよく引用され、暗唱しておられる方も多いと思います。「人々」に名前を入れ、ただキリストを信じ受け入れるだけで、神の子どもとされるとは何と幸いなことでしょう。世では「子どもっぽい」「子どもじみた」というと未熟な言動を意味しますから、あまり良い意味では使われませんが、「神の」とつけるだけで反転して、主に接ぎ木された恵みを喜べます(ﾛﾏ 11:)。主イエスも弟子たちの真中で幼子を抱き、御国に入る範としました(ﾏﾀ 18:)。余計な力を抜いて、笑って怒って悲しみ楽しみ、人間らしく生きることです。「だれが一番偉い」愚問を真剣に主に問うた、かつての浅はかさを恥じながら、ヨハネは「この方を受け入れなかった」同胞を痛みます。神の子どもといえば、旧約時代はヘブル人のことでしたが、異邦人が先んじる逆転現象が起こった。イスラエルの求めていたことは、自分たちの優秀性＆功績＆痛みが認められ、その線上にある救いでした。ところが一番偉くない子どもが一番偉いのだと、予選落ちと思われた子どもこそ相応しいと、主イエスは恵みを語るのでした。

だから異邦人で血筋も能力も凡庸な私たちが、「特権」を与えられたことは、恵みと選び以外の何物でもない。「特権」は「能力」「資格」「権威」とも訳され、カルヴァンは尊厳とします。子どもに何の能力や資格や権威があるでしょう。主イエスは父なる神に対して、素直＆従順に御子として生涯を貫かれました。よって「聖霊＝御子の霊＝子どもの霊」が、私たちの内側に住まわれています。子どものように偉くない人のように生きるキリスト者に、なりたいものです。「その名を信じた」は英語にすると'believe in～'ですが、実際には前置詞が、'into'を表す語が使用され、観察＆考察でなく対象に自分を投入することが、求められています。これもヘブル人に対する痛烈な皮肉であることは勿論で、さらにそのような柔軟な童心が、私たちの霊性と生き方に求められています。子どものような柔らかい心を持った人も、年数を経て硬くなった人もいます。知識を増す成熟は良いですが、みずみずしく神の恵みを受け止めたいもので、若い人が試行錯誤から主との関係を体感する信仰も、大事にしたいものです。聖霊体験を重ねた数だけ成長する。「神の子ども」は成長が期待されています。似姿にまで聖化され子どもになっていく、共に恵みの海に飛び込みましょう。

2 月 9 日

「イエスさまに従う人生」

マタイ 4:18～20
渡邉　賢治　師

主イエスに従う人生 :「わたしについて来なさい。」(19 節)
私は今年信仰 50 年献身 50 年。主イエスを信じ従う人生の幸いを 知らされて来ました。そのあかしも入れながらお分かちします。

主イエスと出会い信じ信頼して歩んだ弟子たち。
① 主イエスとの出会い 「二人の兄弟をご覧になった。イエスは彼らに言われた」(18 節)
ガリラヤ地方の貧しく名もなき漁師ペテロとアンデレ(兄弟) 目をとめられ声をかけられた主イエス。私たちも同じ。

②主イエスに従う「わたしについて来なさい。」(19 節) 主の招きのことばは短い。「わたしについて来なさい」(Follow Me) 彼らはどうしたか。
1)従う決心「彼らはすぐに従った」(20 節) ある人は迷い時間がかかる。でも信じ従う。私は３年でした。
2)捨てて従う「網を捨てて従った」主に信頼した彼らの信仰。 様々な試練に会いつつ生涯従い通した。
3)自分を捨てて従う 「わたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を 負って、そしてわたしについて来なさい。」(16:24) 自分の思いを捨てるのは難しい。主にお任せすることを私は試練を通じて学んで来た。例 : 絶望の中で人生を主にすべてをお任せした。主にゆだね、主に導かれて歩む人生の幸い。

③主イエスとともに歩む
1)主のそばにいる　弟子たちはいつも主のそばにいた。
2)主から学ぶ「わたしから学びなさい」(11:29) そうするなら、
主に似た者に変えられていく。
例 : 主の愛の模範（9:10-13）罪人を愛される主を見よ。

2 月 16 日

「満ち満ちた豊かさ」

ヨハネ 1:14～18

武安　宏樹　牧師

① 幕屋を張られたキリスト（１４節）

本書冒頭でキリストの先在性＆永遠性をヨハネは訴えていますが(1-5 節)、14 節以降で天⇒地、神⇒人へと、この恵みが徐々に下りて具体的になります。この方について彼は生身の人間関係、触れた交わりとして表現し(Ｉヨハ 1:1)、神性＆人性＆受肉を否定したり、状態変化に過ぎぬと言う異端に反論します。「わたし」＆「あなた」が互いにとどまり合う(15:4)。ある意味で肉体関係です。「住む」＝「幕屋を張る」意から、天から主御自身が肉体の幕屋を纏われ住んだ、そこに満ちた臨在は主の昇天で終らず、聖霊を通して弟子たちに内住します。私たちは幕屋の杭として、世の闇を光に変えるべく綱を張り伸ばす存在です。

②　満ち満ちた豊かさ（１５～１７節）

１～５節と同様に、15 節には４つの時制でバプテスマのヨハネ自身による、キリストの優越性が語られます。彼はキリストを指し示す預言者でしたが、それ以上にキリストの「ために」生き、その恵みと真実を叫ぶ「声」(23 節)です。この謙虚さは言葉や善行の量＆質が、第一義的に恵みをもたらすのではなく、そこに神の栄光＆キリストの恵みの存在が優先すべきことを、示しています。「満ち満ちた豊かさ」は日照りでどんなに供給しても、水位が下がらぬダムで、主は空しく生きるサマリヤの女に語られました(4:13-14)。問題があるほど、私たちは恵みの泉に手を差し出すだけで、いくらでも受けることができます。そのたびに主は私たちを似姿へと聖化の完成へと、「実現」してくださいます。

③　懐に飛び込んで（１８節）

旧約時代に神の全体像を見た者は皆無でしたが、誰が見てもわかるように、主が私たちと同じ肉体を纏われて、御自身の姿自体で説き明かされたことが、神の答えでした。「ふところにおられる」とは父＆子の親しさを意味しますが、前置詞「into」の意から、入りっぱなしではなく飛び込んでいく動的な関係を、具体的に御子でありながら、山中でゲツセマネで祈りにより恵みを受け取る、主体性を意味しています。恵みに生きるとは漫然と手を差し出すのではなく、以上三点を知って証しして、受け皿に綻びが生じ駄々洩れになっていないか、求めが乏しくなっていないか確認しつつ、「受けて」＆「飛び込む」信仰です。

2 月 23 日

「あなたはどなたですか」

ヨハネ 1:19～28

武安　宏樹　牧師

ユダヤ人の「お歴々」が３つの質問をします。メシヤの現われにと足を運ぶ知識人といえば、東方の博士たちの謙遜な謁見の辞を想起しますが(ﾏﾀ 2:2)、西方の博士たち(？)の人間的期待から詰問するような、傲慢が感じられます。背景には当方にメシヤを取り込めば勢いづくと、政治的思惑も露見されます。「Ｑ＆Ａ」と言えば主イエスの荒野の誘惑の(ﾏﾀ 4:1-11)、前兆と気付きますが、 極めて自己認識が厳しく謙虚なヨハネが、どのように応じたか見ていきます。

「あなたはどなたですか？」「私はキリストではありません！」(19～20 節)
文頭「私」から、「私ごときがキリストではない」。その後ろには別格の方の訪れを暗示します。間違われて光栄とも思わず、関係者だなどとも言わない。逆に「俺はヨハネだ！」でもない。謙虚と言うと柔弱という印象がありますが、彼はこの上なく謙虚でありながら、この上なく力強い、聖さの実があります。彼は誰に召され何処に立っているか悟るからこそ、謙遜で力強かったのです。

「それでは、何者なのですか？あなたはエリヤですか？」「違います！」(21 節)
これは聖書的根拠があります(ﾏﾗ 4:5-6)。主イエスも断定しました(ﾏﾀ 17:)。なのに何故隠す必要があるのか。わざわざ嘘をつく必要があるのでしょうか。かりに認めたら世からもみくちゃにされ、召された働きが出来なくなります。彼は悪魔の差し出す栄華を見通して、「お宅方の期待する者と違いますよ」と、さらに言えばメシヤの秘密まで(ﾏｺ 8:29-30)、キリストの前座に徹しました。

「では、あの預言者ですか？」「違います！」(21 節)
これは第二のモーセを指しています(申 18:18)。三回も違うと言われては、質問者たちも困りましたが、とうとうヨハネは自分が何者か明らかにします。それが荒野の叫ぶ者の「声」でした。自分の評価などどうでも良いだけでなく、「彼は出来るだけ自分を卑下し、自分のものではない名誉を付与されることでキリストの卓越性が暗くされないように」(ｶﾙｳﾞｧﾝ)目的のある自己卑下です。「謙遜」で収まらない「献身」。私たちはキリストの肢体としてどこから救われ、誰の評価を支えにして、何のために生きるか。ヨハネの献身から問われます。

3 月 1 日

「御霊が鳩のように」

ヨハネ 1:29～34

武安　宏樹　牧師

前日こちらに向かう主イエスの姿を、この日ヨハネは目の当たりにします。「見よ＝Look!」最後の預言者から救い主へバトンが渡される歴史的瞬間です。「神の子羊」とは犠牲に奉献される子羊の意。十字架の死を厳粛に預言します。遠戚ゆえ初対面ではないはずですが、「私自身もこの方を知りませんでした。」「知る」は直観的に理解する意で、「この方」が救い主と初めて結びつきました。そういう私たちはキリストを知っているでしょうか。知識や経験では知って、礼拝に奉仕に伝道にデボーションに励み、一歩一歩主を知ろうと努めます。ヨハネもそうでした。人々に福音を叫びながら水のバプテスマを授けました。何とそこへイエスが受けに来た。「そうさせまい」(ﾏﾀ 3:14)当然押し問答です。彼はイエスを「知っていた」。されど彼の知識や経験を遥かに超えていたのが、全人類の贖いとなるために御自身が、これから救われていくべき弟子たちの範となるキリストの真実で、聖霊が降られること、「子羊」となることでした。

結局ヨハネは「言われたとおりに」バプテスマを授け、聖霊が降られました。押し問答の中で聖霊が働かれて、直観的にキリストであることが分かった。一言で言えば御言葉に従った。ヨハネは他の追随を許さぬ厳しい信仰者です。契約の民でありながら主を忘れる民に、厳しい言葉を発せずにおれなかった。そんな彼が目撃したのは、罪のさばきの厳しさや十字架道の険しさと対極の、「鳩のように天から」降る聖霊でした。平和で無邪気で愛らしい鳩ポッポです。ノアの洪水の伝書鳩(創 8:)、美しい乙女のたとえ(雅歌 2:)など登場しますが、やはり「鳩のように素直」(ﾏﾀ 10:16)を想起します。ヨハネは何を思ったのか。ペンテコステの火の如く降れば(使 2:)、火の玉小僧たる彼の延長線上ですが、鳩のようにとは想定外でした。むろん主イエスは火も鳩も必要ありませんが、非常に力の抜けた愛と平和を貫く生き様を、見せてくださったのでしょう。苦難の僕の従容と屠られる様を覚えます(ｲｻﾞ 53:)。ともかくイエスの受洗に、天の窓が開いて天の全ての賜物が注がれました(ｴﾍﾟ 1:3)。その直後に御霊は、主イエスを荒野へヨハネをヘロデへ追いやります。鳩のような子羊のような、キリストの御霊を私たちはどれくらい知っているか。苦しみにジタバタせず、そういう時こそ天から降る御霊の臨在から、素直に一歩を踏み出しましょう。

3 月 8 日

「涙とともに種を蒔く者」

詩篇 126:1～6

入川　達夫　師

私たちクリスチャンの信仰の歩み、教会の導き、また伝道の働きは豊かな収穫が得られるまでは非常な忍耐と労苦が伴います。しかしその労苦はやがて喜びにかわる時が必ず来ます。詩篇 126 編から、特に伝道の働きに焦点を合わせて学び取りましょう。

Ⅰ．詩篇 126 編の背景

詩篇の中で 120～134 編までは都のぼりの歌という脚注がつけられています。これはペルシャ王キュロスによる捕囚の民が帰還した後に歌われたもので、今日の 126 編は帰還の際に経験した苦しみが喜びに変わる信仰の歌になります。

※考えもしなかった救いに対する喜び（1～3 節）

ペルシャ王のキュロスによる帰還の布告、その知らせに民は夢を見ている様だと言って、うれしさのあまり、笑い、賛美をしました。しかし、彼らが見たのは荒れ果てた町、畑でした。長年放置されていた町、畑を元に戻すのも非常な困難が伴います。

※さらなる回復へのうめきと祈り（4～6 節）

荒れ果てた農地に加え、飢饉があり、わずかな収穫も先住の民が奪い取ってしまうという中、民は神はこの現状を必ず回復して下さるという確信があり、この歌を賛美しました。

Ⅱ．詩篇 126 編から教えられる伝道の労苦と喜び

※種まきから収穫までの忍耐と労苦

4 節には切々たる祈りがささげられています。私たちも伝道を行うにあたり、とりなしの祈りが必要となります。涙して祈る時にイエス様も涙してくださっています。そして、とりなしの祈りから収穫までの時間は主の領域にあります。すぐに祈りが聞かれることもあり、また長い時間がかかることもあります。私たちは忍耐強くその時を待つ必要があります。

※主が与えてくださる収穫の喜び

私たちが涙して祈る祈りに主は祝福をもって答えてくださいます。

Ⅲ．荒廃したこの地に福音の種を蒔こう

※主が与えてくださる収穫の喜びを望み見て福音の種を祈りと忍耐をもって蒔きましょう。

3 月 15 日

「来なさい、そうすれば分かります」

ヨハネ 1:35～42

武安　宏樹　牧師

前回はヨハネが主イエスに洗礼を授ける、「バトンタッチ」の場面でしたが、 もう一つの引継ぎとして、ヨハネの弟子が主イエスの弟子となります(37 節)。「ついて行った」＝「決然と」の意で、ここに二人の類稀な才能を垣間見ますが、 御声に即座に応答する能力こそ、ヨハネの弟子訓練の賜物でもあるでしょう。「あなたがたは何を(＝What)求めているのですか？」主イエスの最初の言葉は 動機を問う鋭い質問です。背景には自分たちの王を求める世論がありました。 士師による神政政治で不満で、周辺国の如き王を求めた 1000 年前同様ですが、「見よ、神の子羊」は自分たちの繁栄と正反対の生き方を、暗に示したのです。私たちも何を求めてキリスト者となり、教会の門を入ったのか問われますが、「求めよ、さらば与えられん」(ﾏﾀ 7:7)たとえ不純でも、ご自分を求める者には、 世が与える金＆名誉＆安全より、はるかに素晴しい報いがあると言われます。 彼らは「どこにお泊まりですか？」と逆質問。大事な話は徹夜でもの構えです。

「来なさい」彼らは歓迎されました。原語「泊まる＝とどまる」は、ヨハネの 福音書＆手紙に 60 回以上登場し、特に 15 章では分かり難い師弟関係の喩えが、 語られます。つまり自室に通して「主の部屋に共にいる」体験をさせたのです。信仰の初心者が聖書全体を読んだ訳でもないのに、「これだ！」と腑に落ちる。 それは錯覚でも魔境でもなく、最初から惜しみなく見せてくださるからです。 逆に言えば無限の神の見せる世界観を、人間が答えられるなど不可能であり、 主とのコミュニケーションの中で答える訓練を通して、霊性が深まるのです。 彼らの応答は弟が感動のあまり飛び出して、兄を連れて来たことが全てです。 かのペテロ御大が、地味に思える弟アンデレを通して救われたとは驚きです。 もっとも兄弟間の優劣など人間的な見方で、賜物の違いを益とされる主です。 主は連れて来られた兄の目を直視し、彼の内にあふれる希望を見出しました。 直情径行型でリーダーシップに富む兄に比べ、器用で察しの良い弟でしたが、 主はシモンに、一見して不釣り合いに思える「岩＝ペテロ」と命名しました。 体当たりで時に荒々しく時に落ち込む繰り返しが、筆頭弟子へと成長します。 全ては彼の業ではなく聖霊の働きで、不祥事を起こしても関係は変わらない。 主は愛の方です。「来なさい。そうすれば～」は不器用な者を招く言葉です。

3 月 22 日

「偽りのない人」

ヨハネ 1:43～51

武安　宏樹　牧師

前回はアンデレがペテロを導き、今回はピリポがナタナエルを導く話です。前者の単純率直さに比べて、後者はいくつかのやりとりと疑問が出てきます。十二弟子派遣の組み合わせは、性格の相性も意図されたのでしょう(ﾏﾀ 10:)。「わたしに従ってきなさい」(43 節)の招きに応じて、ピリポは弟子となります。彼もすぐにナタナエルを導くも、漁師兄弟と違い聖書的蓋然性に訴えました。それは評価すべきですが、人間的血筋ベースで語って誤解が生じます(45 節)。ナタナエルは「ナザレ出身」に疑義を挟むも、ピリポに押されて足を運びます。いきなり初対面で「真にイスラエル人なり、その衷(うち)に虚偽(いつわり)なし」(47 節文語)と、彼の一途な姿勢について、畏れ多くも族長の名も引用しつつ評価されます。

イスラエルの旧名ヤコブといえば、兄＆叔父を騙し人生が偽りの塊でした。かくて兄に追われ叔父から逆に騙され、故郷に向かう先に試練が待ち構える、絶体絶命のピンチにて徹夜で御使いと格闘しながら、相手が神だと知ります。内なる恐れや罪意識や自我と戦い、自分の限界を悟り砕かれることを願って、もものつがい外れ戦闘不能になるも、神の人はヤコブを認めました(創 32:)。そして彼は闇の中で神を見、死んで生きる「負けるが勝ち」を体験したのです。このような人生を主イエスはナタナエルの内に、求道心と孤独感を見ました。「いちじくの木の下に」(48 節)とは、彼の祈りに没頭する生活を言い当てます。心の深い葛藤を取り扱ってくれる存在に、明け渡し(私)をする者の好例です。

「あなたは神の子～イスラエルの王」(49 節)信仰告白は、後半の理解不足で、採点すれば 50 点でしょうが、寛大な主は門前払いせず幻を提示します(50 節)。天からの梯子が何処に着地 するのか、彼は未だ理解できず悶々としましたが、「人の子の上」(51 節)すなわち「わたしは門」(10:9)と、主は解答を与えました。キリストが間に入り御使いを統轄して、彼自身からイスラエル～異邦人まで、全世界の救いが、やがて聖霊により彼らの建てる教会が天の植民地となって、拡がるのです。漁師兄弟は部屋の中で平面的、今回は天地の垂直的青写真で、彼は主との会話による深い知的理解と洞察から、真理の海に漕ぎ出すのです。

3 月 29 日

「神のことばで生きる」

マルコ 14:32～42

杉山　義也　師

イエスさまは一緒に祈ってくれる弟子、イエスさまが最も信頼を寄せていたペテロ・ヤコブ・ヨハネの、三人の祈りによるサポートを望まれました。彼らにできるイエス様のサポート、それは彼ら弟子にとっては目を覚まして、ともに祈ることでした。でも、弟子たちは主の心の内を知ることができず、眠ってしまっていたというお話です。果たして、主の弟子である僕たちは、目を覚まして、主イエスの心に迫ることができるかどうか。それが、僕たちの課題です。

「あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです。身を慎み、目を覚ましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、吠えたける獅子のように、だれかを食い尽くそうと探し回っています。」（Ⅰペテロ 5:7－8）

後になってペテロが思い返すと、ゲッセマネの園には、確かに悪魔の攻撃がありました。イエスさまは祈りの中で悪魔と戦っておられました。そして、ユダを初めとして悪魔の手先たちも園に近づいていたわけです。でも、そんな中自分たちは寝てしまっていた。このような失敗を思い出しながら、ペテロは手紙を書いたんだと思います。やはりサタンの誘惑に打ち勝つには、「神のことばに生きる」という方法しかないわけです。そして僕たちが今いただいている平安、恵みっていうのは、ゲッセマネにおけるイエス様の葛藤と、十字架の勝利があればこその、救いの恵みであることを覚えたいと思います。

4 月 5 日

「最初のしるし」

ヨハネ 2:1～12

武安　宏樹　牧師

当時の結婚披露宴は多くの客を招いて１～２週間も続き、飲めや歌えやで 満足させる分の酒量が必要でした。主イエスと母の会話は難解に見えますが、「わたしの時」は来るべき受難を指し、母の謙虚な指示は信仰が満ちています。 そして言われた通りに水がめ６つ(計 600 ﾘｯﾄﾙ)に、あふれるばかり水を注いで、 持ち運びました。この水はきよめの儀式のため用いられるものでした(民 6:)。 そこで思い起こすのはナジル(＝聖別)人で、ヨハネもナジル人と思われます。 だから水がめ６つには、１章で姿を消したと思われたヨハネを暗示させます。 水の洗礼も水がめ６つも忠実な給仕も、全て人間の最善の努力を示しますが、 ご存知のように「６」は「７」に一つ足りない、不完全数を象徴しています。 つまり「７つ目の水がめ」こそ、天からキリストの上に降りし聖霊なのです。６つの水がめで到達できない救いこそ、恵みとして降られる聖霊の業です。

「そこで思い起こすのは、天地創造を６日間で完成されて７日目に休まれた、 御業ではないでしょうか。実質的に６日間で世界は完成し不備は無かった。 けれども神の目にはどうしても一日が必要だった。手を動かすのではなく、 休む日として、神のためではなく、人間のために必要だと思われたのです。 ６日間のまま渡したら、人間は働くことで完結し、主を忘れてしまいます。 かくて７日目に休まれて完成宣言された。もう一つは祝福と聖別のためです。 人も人の業も自己完結できるように見えて、実は神の祝福で初めて完成する。 以上のことを知ると、主との交わりとへりくだりを求めて安息日を喜べます。 ちなみに第１～６日にあって、第７日に無いのが「夕があり、朝があった」で、 このことを聖アウグスティヌスは「暮れることなき日」と呼びます(小畑進師)。 ６日間の業も尊いが７日目は永遠の安息に。言い換えれば天からの救いです。

水がめの水はどのタイミングか不明ですが、ぶどう酒に変わっていました。 新郎新婦も客も世話役も豊かに飲んで、天の喜びあふれる祝宴となりました。 私たちもなすべき務めを喜んでなしつつ、永遠の恵みに酔いしれる民です。 安息日も主日礼拝も祝宴です。けれどもこのぶどう酒は主の死を示します。 受難週に苦難と死の彼方にある、豊かな恵みの拡がりを黙想したいものです。

4 月 12 日

「新しい神」

ヨハネ 2:13～22

武安　宏樹　牧師

宮清めの記事ですが、三福音書とは位置が異なります。「宮」は異邦人の庭を含めて敷地全体、「神殿」は祭司のみ入ることが許される本殿を指しています。本来は異邦人の庭は神殿に入るための備えの場でしたが、徐々に世俗化して、イエスの時代には商業の場として、貧者や不案内者への搾取が横行しました。怒りを覚えたイエスが商売人を追い出して、商売道具を荒らし回ったことに、既得権侵害の危機感を覚えた聖職者たちは、殺意を抱きました(ﾏｺ 11:15-18)。

マルコは「あらゆる民」で異邦人＆弱者へ、救いの水平的拡がりが見えます。ヨハネは神殿破壊＆再創造の宣告から、天に至る新しい道について語ります。神殿というキーワードは、律法と置き換えることが出来るでしょう(ﾏﾀ 5:17)。実は宮の中で行われた商売は、以上の悪徳商法は別として律法的に問題なく、巡礼者にはむしろ親切なことでした。聖職者も出店者も巡礼者も満足して、人的＆経済的循環があると、真の意味で誰も救いを得られなくなってしまう。結果的に神殿に仕えるのも律法を守るのも、神礼拝を妨げる悪循環でした。

私たちはどうでしょうか。どれくらい献金をして、どういう奉仕をして、聖書知識のテストに通れば、天国行チケットを得たり地位が向上するなどと、信仰生活を可視化したら楽かもしれませんが、全ての人が同じ道を通るため、優劣がはっきりします。往々にして人は地上から天へ軌道が敷かれていると、錯覚するもので、もしそうならば、ユダヤ人は異邦人より天に近いはずです。けれども神は天から降りて来られ、バベルの塔を破壊し人を解散させました。パウロ曰く、世が自分の知恵により神を知ることがないためです(Ｉｺﾘ 1:21)。

4 月 19 日

「人のうちに何があるか」

ヨハネ 2:23～25

武安　宏樹　牧師

主イエスはキリストであることを人々が信じるために、数々の奇蹟を行い、第一弾がカナの婚礼でした。水が酒に「変化」など、人知では説明できません。聖書は神が万物を想像された価値観の中で、自然と超自然が融合しています。組織神学では奇蹟は啓示論の範疇ですが、むしろ神が自由に手を動かされる、太陽が上り雨が降る自然面を含めて、摂理論の方が相応しい(新ｷﾘｽﾄ教辞典)。しるしには人の霊の目を覚まさせる目的があり、ただ信じさせるだけでなく、目撃した人間が世の常識から解放されて、自己中心的な肉が砕かれるために、世の常識人かつ神の視点から非常識さで、成長して神と人に仕える手段です。

幼時から唖者の霊につかれた子を何とかしたいと、父親が連れてきました。弟子でも適わず、主イエスも駄目ならどうしたらよいのか迷いもありました。「しかし､おできになるなら」(ﾏｺ 9:22)半信半疑、されど一世一代の願いです。主は深く憐れまれて「信じる者には､どんなことでもできる」と招かれました。「信じます。不信仰な私をお助けください。」もはや迷いは霧消していました。単にいやしを行うかどうかいやされるかどうか、結果で判断する人間と違い、心の中を深く洞察しながら信仰の芽を育み、一元的にいやす主が見られます。神との交わりに砕かれて信仰が導かれる中で、しるしが現れます(ｲｻﾞ 57:15)。

M･エリクソンは主イエスの奇蹟の目的を大別すると、三点が挙げられて、①代理者である人でなく神に栄光を帰すため、②啓示の基盤を確立すること、③人間の必要を満たすため。反対に利己的な力の誇示は決してされなかった。以上を踏まえると、「彼らを信用されなかった」(共同訳)理由も判然とします。奇蹟を見て入信する者も多いが、同時に岩地に落ちてすぐに枯れる種も多い。実を結ばず途絶えてしまう魂の多いことの残念さを、主は熟知していました。「人のうちに何があるか」最も心と直結した部位が目と言われますが(ﾏﾀ 6:22)自分なりの霊的洞察と称し、人をいやすどころか苦しめてはいないだろうか。家族にも判らない心の動きが、直接的に聖霊の介入を求めることもあります。神がどう造られ見ておられるかの視点を持たない限り、真の弟子になれず、されど砕かれて神と人を知ろうと志す時、私たちを通して奇蹟は起こります。

4 月 26 日

「信じる者に伴うしるし」

マルコ 16:17～18
武安　宏樹　牧師

本章９節以降は後代の加筆部分で、とりわけ 15～16 節の宣教命令に比べて、17～18 節「信者に伴うしるし」については、聖霊のバプテスマ＆賜物＆職務等、教派間で見解が分かれることもあり、各註解も扱いが薄く面倒な部分ですが、神学＆体験的各論に入らず、信仰の結果しるしがあることを覚えたいのです。私たちキリスト者は、同じ御霊を宿す者としてキリストの御業の代行者です。このことを個人的な視点よりも、教会のしるしとして総論から捉えましょう。聖霊論＆教会論はセットですから、聖霊の実＆賜物はキリストの肢体(からだ)論から、語られるべきです(Ⅰコリ 12:)。教会は堕罪で歪んだ被造物の回復センターで、霊＆心＆体＆社会形成も含みます。萎縮した時代に「しるし」を覚えましょう。

コロナ禍にあって、諸教会の置かれている現状は、大変厳しいと言えます。大都市圏はほとんどの教会が集会を止め、インターネットで対応しています。ＳＮＳで機材の情報共有や牧会対応など、「集まらない」シフトが大勢です。そんなに教会は危ないのか。確率は夜の業種に比して格段に低いでしょうが、感染者やクラスターが出た場合の社会的非難への恐れが、一様に見られます。疫病について主イエスは終末の前兆として、起こると預言します(ﾙｶ 21:11)。他の戦争＆信仰弾圧や震災は現代にありましたが、疫病はほぼ未知の領域で、行政＆医療もお手上げ状態です。政治はともかく経済は国際的規模なので、長期化すれば倒産や失業が増えて、国民が心身ともに疲弊して国が傾きます。

当教会が集会継続できているのも、現状ではそれが合理的だからであって、先行きは主に委ねるしかありません。ネット化の場合は霊性や財政の維持も、大変でしょう。社会全体だけでなく、世にある教会もある意味で無力です。逆に言えば今ほどキリスト者と教会が何か、聖書に聴き直す絶好の機会です。「われら四方より患難(なやみ)を受くれども窮せず」(Ⅱコリ 4:)パウロは日々復活体験を強調します。私たちは無力感の中で聖霊により立ち上がる体験を日々します。最も手ごわい悪霊は失望落胆です。試練という毒を飲み痛めど害まで受けず、世間から見ればタフな人種です。無力な時代にしるしを隠してはなりません。世に振り回されず発信するために、逆転の発想と「新しいことば」が必要です。

5 月 3 日

「新生体験」

ヨハネ 3:1～8

武安　宏樹　牧師

議員ニコデモが主イエスを訪問。彼は一言で「弟子になり損ねた人」です。 弟子たちは理解の浅い部分もありましたが、人生を捧げる決断をしたことは、 後の活躍を見れば明白です(ﾏｺ 1:16-20)。彼らは素朴で率直な信仰者でした。 彼は弟子たちとそう変わらないキリスト理解を、持っていたにもかかわらず、 夜にこっそり訪問したところに、彼なりの計算と恐れと二心があったのです。 されど会いたくて会った、パリサイ人でも彼のように純粋な人もいたのです。

それでどこまで近づけたでしょうか。本書の後の方に彼は２回登場します。 １回目はイエスを逮捕しようとする勢力に対して、律法の正しい運用を訴え、 弁護を試みました(7:47-51)。議会とイエスの間に入ろうとしたのでしょう。 自分たちの神輿の上に担ごう、逆に言えば神の子を引き下げようと努力した。 彼の栄誉を無にし世間を敵に回してまで、信仰告白には至らなかったのです。 ２回目は時すでに遅し。イエスが死んでから香典持参で再訪します(19:39)。

彼は弟子たちのように頓珍漢な受け答えも、御言葉に食ってかかることも、 十字架を前に御名を否んで逃げる失敗もしなかった。傍観者だったからです。 エリート宗教家に過ぎず、失敗もしないが復活の主に見える恵みも無かった。 まみ ペテロのように心刺されてうなだれながら、再献身する新生体験も無かった。 金貸しのたとえ「多く赦された者が多く愛する」(ﾙｶ 7:41-43)が理解できずに、 神に対して債務どころか、当然報いられて然るべき債権者と信じてやまない。「持てる者」が救われない訳ではないですが、彼は捨てることが出来なかった。

しかしパリサイ人も救われることを証明したのがパウロでした(ｶﾞﾗ2:20)。 私たちはニコデモとパウロどちらに近いですか。十字架を体験していますか。 両者は対照的ですが、弟子になり損ねた彼のことも主イエスは門前払いせず、夜でも来てくれて質問してくれてうれしかったので、ヒントを与えられます。 すなわち新生とは人間が五感を駆使しても、把握できない「風」のようであり、 いつの日か彼が恵みを悟って再生する日の到来を、主は願っておられました。 下から上でなく上から下に受けるいのち。パウロはこの恵みに開眼しました

5 月 10 日

「いのちの道」

ヨハネ 3:9～15

武安　宏樹　牧師

新生問答の続きです。パリサイ派は他宗教同様「下から上へ」の教えですが、 パウロはキリストとの邂逅で新生体験を通し、天から永遠のいのちを受けて、 あまりの勢いに総督も王も危機感を感じる、「キリスト馬鹿」となりました。 ニコデモは「どうして、そのようなことがあり得るでしょうか。」と突っ込み、 未だに自分の知恵で律法を組み立てつつ、神の国に入ろうと苦闘しています。 聖書の記述は知っていても(ｴｾﾞ 36:26)、天と地の橋渡し役がイエスであると、 どうもピンと来ない彼は求道者でもあり、深い部分に傲慢を宿してもいます。 そこで主イエスは切り札に、青銅の蛇(民 21:)をたとえとして提示しました。

出エジプトの経路はシナイ山で律法を拝受し、約束の地へ一直線といかず、 民の根強い不信仰からカデシュ停滞と迂回を余儀なくされ、不満が募ります。 そこへ送られた燃える蛇(複数形)により、民は不従順を認め悔い改めました。 さらに取り去るのでなく旗ざおにつけて仰ぎ見ることで、彼方に赦しの主を 見上げる目的がありました。これは偶像でなく天を見上げるバイパスでした。 おそらくニコデモにとって、過去の遺物の域を出ていなかったと思われます。「上げられ」は「十字架につけられる」&「天に上げられる」の「W高挙」の意で、 さばきと栄光の二要素が目の前のイエスで結びつくか、問われていました。

蛇と言えば、エバを誘惑して人類を罪に沈めた創世記 3 章を想起させます。 原福音と呼ばれる箇所ですが(創 3:15)、神の視野の中に堕落した女の子孫も、 キリストと悪魔の壮絶な戦いの末に、信仰による回復が予定されています。 蛇は人の子のかかとを咬む程度も、人の子は蛇の頭を砕いて息を止めます。「それゆえ、このことばの意味は、サタンが圧倒しようと試みた人類は、最後に 勝利するというにある」(ｶﾙｳﾞｧﾝ註解)青銅の蛇は赦しを忘れないようにとの、 消極的目的に留まらず、やがて来るキリストの究極的勝利も含意したのです。 そういうわけで主イエスは神の子でありながら、彼と同じエバの子孫として、「それは、信じる者がみな、人の子にあって永遠のいのちを持つためです。」と、 彼に力なく生きていないか、蛇の彼方にわたしを見上げて永遠のいのちから、 力ある新しい人生をわたしと共に生きてみないかと、手を伸ばしています。

5 月 17 日

「一人も滅びないように」

ヨハネ 3:16

武安　宏樹　牧師

「福音の要約」と謳われるあまりに有名な聖句で、四つの法則等伝道冊子に、必ず引用されます。原文は「そのように」で始まり、ニコデモの話を受けつつ、 旧約時代からの福音の底流から、「そのひとり子をお与えになったほどに」は、 アブラハムのイサク奉献を想起させ(創 22:)、そこから父の痛みを思います。

「アブラムは主を信じた。それで、それが彼の義と認められた」(創 15:6)が、 彼の在り方を表しています。75 歳で故郷を発ち、御言葉の示す地へ向かい、 行く先々で祝福ばかりかといえばとんでもない、約束の子孫も一向にできず、 奴隷に産ませた子は追放され、それでも 90 歳の老女から来年誕生の御言葉に、 笑うしかない状態でしたが、神の奇蹟は生理有無を越えてイサクを生みます。 老夫妻に念願の実子誕生。後事を託して平安と思った矢先に驚きの命令です。 父自ら子を殺せとは、彼の信仰の旅路と御言葉の筋道から逸脱することで、全てがひっくり返ります。けれども彼は御言葉通りに子を連れて出発します。 そして刃を振り上げ信仰の系図が断絶の瞬間、羊が備えられていたのでした。

ここに父なる神が御子を捧げる心があります。心引き裂かれて山へ向かい、子を背負う彼方に、永遠のいのちの子孫が増え拡がる満天の夜空を見ました。 アブラハムが粛々と子殺しを試みたのは、一番星にキリストを見たからです。かくてイサクを死者の中から取り戻します(ﾍﾌﾞ 11:19)。信仰の旅路は一直線 ではなく、無から有へ、死からいのちへ、地から天へ、人間には届きません。 羊を木に下げ、キリストを復活させたのは神の力です。息子の死の向こうに、 世界の救いを遠望する。律法の二大原則の、神を愛し隣人を愛する究極です。「信仰は、望んでいることを保証」(ﾍﾌﾞ 11:1)するからこそ、子を捧げたのです。

自分の救いを求めて律法の道に精進したニコデモには、抵抗があったので、「人は新しく生まれなければ～」と主イエスは語りました。私たちはどうか。 ひとり子の如く大切なものがあるか。それを捧げるのに躊躇するのは何故か。 また捧げて余りある恵みをどれくらい受けたか。歩む途中は分からなくても、 互い違いの恵みを経ながら、献身の彼方に永遠のいのちの世界が拡がります。

5 月 24 日

「信じる者と信じない者」

ヨハネ 3:17～18

武安　宏樹　牧師

「さばき」というと、黒地に白字の「死後さばきをうける」壁面看板のように、 恐ろしい印象がありますが、日本人の宗教意識としては殺人や交通事故など、 社会的非難を受ける立場に置かれない限りは、自分が罪人という意識が薄く、「赤信号みんなで渡れば恐くない」式の罪の公共性で、希釈化され霧消します。 だからいじめや差別などは社会悪＆必要悪と見做され、根本的に消えません。 されど人種に関らず神の被造物ゆえ、自覚以前に潜在的な罪性は未解決です。 律法を知るニコデモは救いに近いところにいながら、救いの確信が無いため、 わざわざ夜にお忍びでキリストを訪れた。それは不足を感じていたからです。 サンヘドリン構成員である彼は、公然と人をさばくことのできる立場でした。 職務上はともかく、自分がさばかれるに値しないと思えるかは別問題です。 もしかしたら律法を通し神と向き合うことから、逃げていたかも知れません。「さばいてはいけません」(ﾏﾀ 7:1)は第一に人と人ですが、背後に神がいます。 簡単に人をさばこうとする背後には、自分の悪口が関係者に同調を求めて、 さらに影響力ある者は世論を醸成して、敵を社会から追放＆抹殺を試みます。

現代はインターネット社会で、誰でも書き込んで炎上さえ簡単に出来ます。 一言で言えば誰でもさばくことが出来る、神となりうる時代となりました。 もちろん災害対策や地域社会の情報共有など、良い面も多々挙げられますが、 その反面で一人が扱いきれないほどの情報で、膨大な仕分けが必要となって、 人間関係が事務的＆空疎になりました。文明の進歩が人間の進化とはならず、 かえって私たちは神と一対一の交わりから発す、アナログな時間が必要です。 恵み溢れる神の交わりから、じっくりと兄姉や家族と時間を過ごして交わり、 疲弊した心の叫びに傾聴し、真に大事な言葉を語ることが求められています。 人をさばき、自分をさばき、情報をさばく世の流れの中で疲れていますが、だからこそ主イエスは解放を宣言されたのです(17 節)。自分の救いのために、 いや主イエスは罪無き自分がさばかれることで、世を救うために来ました。 本質的に無限で自由な方だから、罪からもさばき合いからも全く自由です。 にもかかわらず不自由となられた。三位一体の神の間に愛があるからこそ、 信者間に神の愛の語が使われています。私たちは愛の中で隣人へ献身します。

5 月 31 日

「光の方へ」

ヨハネ 3:19～21

武安　宏樹　牧師

主の弟子たちに聖霊が降り、地の果てまで教会が生み出された記念日です。 本書冒頭「光は闇の中に輝いている。闇はこれに打ち勝たなかった」(1:5)と、 キリストの勝利を宣言します。このことを私たちは信仰により受け止めます。 キリストを忘れると自分や世を見て、「光は闇に打ち勝たなかった」と錯覚し、 様々なことに不安になります。そこから目を上げないと御言葉が入りません。 神が最初に発した御言葉こそ「光、あれ。」(創 1:3)それ以前は神と闇しかなく、 まず光が生まれて闇と分けられて、太陽や月が出来るのはだいぶ後でした。 そして終わりの日には光の源なる神御自身が照らすので、発光体は不要です。 よって「わたしは世の光」(8:12)御子の宣言は、世の終わりの始まりなのです。 キリストが光源なので、世の被造物が取り去られ、私たちの家族も心配事も、 仕事も学校も吹っ飛んでも異論がありません、極論すればそうなるはずです。 ヨブは全て剝ぎ取られた後に誕生と、遡って天地創造の秩序まで呪いました。 暗闇が覆う茫漠に自らを重ねながら、狂おしくキリストを渇望する姿でした。

だから神の性質そのものなのが、ヨハネがキリストを形容する「光」です。 平面的には地の果てまで、垂直的には人の心の深み、そして陰府まで照らす。 彼は「光が世に来ている」と過去形ではなく、過去から継続の時制で示します。 とはいえ見える形で世には居られない。もっと剛腕で世をさばきまくるなら、 存在を誇示できるのにと願う人もあるでしょうが、神はそういう方ではない。 荒野での不従順に手を上げながらも、モーセが必死にとりなすよう仕向けて、 少しでも民に赦しと恵みを知らしめつつ、愛なる教育的配慮に満ちています。 キリストの御霊による成長軌道は、徐々に時間をかけ光が闇を圧殺していく。 まさに天地創造の如く日ごとに丁寧に形成し、最後は休みもある匠の技です。 だから神の光は人の罪深さや弱さに合わせ調節される、優しい光なのですが、 それだけでなくパウロが倒され、ペテロを牢獄から解放した強烈な光もある。 これは霊的戦いの最前線に立たされるための、徹底的な聖別を伴う御霊です。「愛した」は神の愛を表す語から、卑俗な事柄への罪人の執着愛を表します。パウロもそうでしたが、頑なな者の向きを変えるには強烈な体験を伴います。 この御霊の光で内なる闇が照らされて、世へ屈折せず届くよう祈りましょう。

6月7日

「衰えていく喜び」

ヨハネ 3:22～30

武安　宏樹　牧師

バプテスマのヨハネの人格については、非常に厳しい預言者でありつつ、 常に自分はキリストの前座と公言して憚らない、一言で言えば謙遜な人です。 されど彼は卑小な人物ではなく、主イエスは人類最高と評します(ﾏﾀ 11:11)。 両者は互いに認め合う麗しい関係ですが、通常は謙遜とは難しいものです。 他人を意識するのはセルフイメージの不安と、愛の欠如によるものですが、 以上は信仰によって克服可能です。ヨハネの謙遜の要素を見ていきましょう。

① キリストを知っていた

ヨハネはイエスの遠戚かつ、エリヤの再来ならば地上に生を受ける前から、 全てではなくても御子が天においてどれほど栄光に満ちて、父が愛されたか、 知っていたと思われます。よってヨブを高慢の霊的病で惑わす悪魔の策略も、 見破っていたでしょう。だからこそ自分如きが比較されるなどとんでもない、 かえって失礼と思っていた。もちろん彼と私たちではスタートが違いますが、 要するに神を知っているか。その全知全能とキリストの救いと聖霊の臨在で、 自分の小ささを悟り、さらに恵みを求め大胆に近づく求道者たることです。

② 自分を知っていた

かくてヨハネは主の前に道を整えるべき、期間限定の作業員に過ぎない、 下僕の資格すら無いことに満足していました。そのような自分の立ち位置が、 かえってキリストの栄光を輝かせると確信していました。断じて屈折でなく、 神を知り自分を知り人生の目的を深慮するゆえの、信仰的で合理的な態度で、 受洗競争とか夢にも思わず、相変わらず自分の為すべき奉仕に専心しました。 両者の関係はバトンタッチではありますが、束の間の協力関係にもあった。 ここに与えられた賜物をもって主体的に仕え合う、教会奉仕の原型を見ます。

③ 衰えていく喜び

弟子たちの移動で目に見えて教勢が翳りを見せても、従容としていました。 花嫁花婿の記述は終末を指しますが、彼は自分の務めの重要性を理解しつつ、「あの方は盛んになり､私は衰えなければなりません。」の名文句を遺します。 衰えるの原語は低くなる、下位となるの意で、体力＆気力の衰えと違います。 かつての舌鋒鋭さに比べれば衰退に見えて、この武装解除こそ本望でした。 血気盛んさが砕かれて、自分を鼓舞していたエネルギーが取り去られると、 一時は受け入れ難くとも、今までと異なり新しい平安と力が湧き出て来ます。

6 月 14 日

「その手にすべてを」

ヨハネ 3:31～36

武安　宏樹　牧師

本書執筆目的の一つに、バプテスマのヨハネが過大評価されている影響で、キリスト教とヨハネ教が併存している現状に、危機感を覚えたと思われます。以降４～５世紀に教理が固まるまでは、人間的教えとの戦いが続きましたが、人を見てしまう弱さは私たちも同様ですが、上からの恵みを覚えることです。

① 天から来られたキリスト

本書冒頭でキリストとヨハネ双方の訪れが比較されています(1:1-5/6-8)。すでにヨハネは殺されたので過去形ですが、キリストは未完了や現在形から、太古の昔から神と共におられ、その光は今なお輝き続けていると語られます。私たちの信じる方は、ヨハネや釈迦やマホメットの如き「過去の人」ではなく、「現在進行形の神」であり、過去＆現在＆未来の歴史の全てを支配しています。かくて創造～終末に至る地上の救いの架け橋は、窓口をキリストに一本化し、旧約のアダム～ノア～アブラハム～モーセ～ダビデから、ヨハネに至るまで、全ての救済史がキリストへ集中し、義人も罪人でも信仰によって救われます。地上での行いの良し悪しに拘らず、信仰という関所をくぐったかどうかです。だから救いは非常に単純かつ公平ですが、わが国の汎神論的価値観によると、地上から天へ上昇の方が理解しやすいですが、それでは罪人が救われません。私たちも罪人でしたが、救いに選ばれ世が理解できない福音を信じたのです。

② 天から降られた御霊

キリストにあってヨハネに無い一つが救いの窓口、もう一つは祝福機能で、聖霊が降られると上からの力により御言葉を語り、キリストの権威を代行し、救いといやしと解放が生まれます。神がキリストに全面的に注がれた御霊は、私たちに賜物を内包しつつ無限に分与され、求めた分だけ継ぎ足されますが、こんな程度でと求めないと、アナニヤ＆サッピラの如く別の霊が惑わしたり、コリント教会の如く党派心から、賜物を競う足の引っ張り合いへと堕します。初代教会の特徴は、捧げ物＆礼拝＆魂の獲得が「一つ」になる霊的循環でした。パウロが肢体論で強調するのは、一つの御霊と多様な器官の血の通い合いで、手や足など器官は多くとも頭は一つです。自分がどんな器官で賜物を有すか、さらに肢体が機能するよう求めると、そこに力強く謙遜な奉仕が導かれます。多様性と寛容の中で主にあってさばかず、人を理解しようとする霊的資質は、教会が数でもプログラムでもなく、一つの御霊に依り頼むことで生まれます。

6 月 21 日

「サマリアを通って」

ヨハネ 4:1～6

武安　宏樹　牧師

パレスチナ地方は順にエルサレムのあるユダ、サマリアのあるイスラエル、 主イエスと弟子たちの出身地ガリラヤに分けられます。ソロモンの堕罪から、 王国は分裂し北イスラエルの方が先に滅び、二重礼拝と雑婚で霊的に乱れて、 以降は南北間で交流が途絶え、神殿を両都に擁するなど対抗心がありました。

① 衝突を避ける（１～３節）

動機としてはヨハネ以上に弟子が増し加わり、パリサイ派からの問題視が ありました。彼らを恐れた訳ではなく、論争して敵をねじ伏せることよりも、 少しでも多くの町々村々を回って、一人でも多く福音を伝えたかったのです。 いずれ逮捕され殺されるとしても、時間を逆算して有益に用いようとされる。 地域的な敵意や飢え渇きなどの総合的判断に、主の全知が用いられています。 弟子訓練の必要もありました。その過程で宣教の御霊が地境を拡げています。

② サマリアを通って（４～５節）

主イエス一行はガリラヤへ。あえて忌避すべきサマリアを経由としたのは、 消極的には最短経路、積極的には神の御計画のため必然でした(3:14,30)。 痛んだ地に福音を、それも誰でも良いのではなく敢えて水を汲む女に定めた。 最初は不審に思われたでしょうが、結果的に彼女を通して宣教が進展します。 それだけでなく南北の歴史的経緯が、キリストにあって一つにされることが、 伝道者ピリポのサマリア伝道の成功と、霊的な祝福へと実を結びます(使 8:)。 目的主導が流行しましたが、だからといって過程を軽視してはいけません。 千里の道も一歩一歩を御言葉に照らされながら、計画の全容が見えてきます。

③ 座って見えること（６節）

旅の疲れで座り込む主イエスに、力に満ちて行動的な姿は見られません。 けれどもそれが女には良かった。お互いに可哀相な雰囲気が漂っていました。 定点観測で見える風景があり、体を休めることで人となりがよく見えてくる。 積極的に語るのでなく、聞かれたことに静かに答えながら時間が過ぎていく。 これも立派な宣教です。人為的＆効率的な活動だけでは歯車が狂ってきます。 動きすぎて我を失っていませんか。意外なところで新たな一歩が生まれます。

6 月 28 日

「水を求める人」

ヨハネ 4:7～15

武安　宏樹　牧師

表題「水を求める人」は、7 節で主イエス⇒女、逆に 15 節で女⇒主イエスの、 両方の人を重ねています。ユダヤ人男性がサマリア人女性に求めるという、 常識的にあり得ない出会いから、主イエスは心の距離を詰めつつ核心へ入り、 束の間の快楽を求めては捨てられ続けた、生ける屍同然の女に近づきます。 されど絶縁関係にある人種に何故水を求めるのか？ 疑いの眼差しの一方で、 この人は何だろうという関心もあり、あえて主イエスに食ってかかりますが、 コンプレックスまで全て受け止めた上で、ど真ん中の直球を返します(10 節)。「私がキリストだ。永遠のいのちをあげよう」などと結論ありきの返答でなく、 受け入れる準備も何も出来ていない女が、単なるひやかしで終わらないよう、 互いに言葉だけでなく心に届く球を返す、キャッチボールに教えられます。

女は未だ「神の賜物」「だれなのか」の理解に及ばず、「生ける水」も時期尚早。 未だ物質としての水しか思えず、「どこから手に？」からかいの域を出ません。 しかし明らかに言葉の使い方に変化が見られ、無意識に「井戸の深さ」などの、 キーワードを発し、自分の発言から霊的な飢え渇きへお膳立てを整えていた。 ここで主イエスは三人称「その人」⇒一人称「わたし」へ、女を個室に招きます。 彼女にとって個室とは幾夜も男どもと肌を重ねた、寝床を意味するでしょう。 けれども何人と何度交わろうとも違和感を禁じ得ず、また次を求めてしまう。 『この水を飲む人はみな、また渇きます。』と聞いて何を思ったことでしょう。 もしや私のこと？ ここで主イエスは未だ「あなた」と表現してはいませんが、 女が引用した「生ける水」に霊的な意味をリンクさせながら、深みへ導きます。

「しかし、わたしが与える水を飲む人は～」招きを彼女はどう受け止めたか。 振り回され騙され吸い取られ村八分にされ、人を信じられず利用しか考えず、 生きている意味さえ分からない者が、差し出された高尚ないのちに躊躇する。「その水を私に下さい」未だ斜に構えつつも、不思議と半信半疑まで進んだ。 どうしようもない女も主との交わりで、屈折した心が徐々に解かれています。「わたしは渇く者に、いのちの水の泉からただで飲ませる」(黙 21:6)生ける水。 タダより高いものは無いと言われますが、求めるだれもが受けられるのです。

7 月 5 日

「真の礼拝者」

ヨハネ 4:16～26

武安　宏樹　牧師

主イエスの求めに、これまで女は半ばからかいながら応じましたが(15 節)、 つづく痛い過去を暴き出すかのような戦慄の話法に、臨戦態勢に入ります。「夫がいません」答えた女の逃げない素直さを、「本当のことを言いました」と、 主イエスは高く評価し、女の方もかえって単刀直入に罪と洞察を示されつつ、 心が開かれます。本能に素直なので悪事を重ねつつも、きちんと向き合えば、 謙虚に罪を認める。この率直さが「まことの礼拝者」へと、道を開いたのです。 真理の基盤において五書限定のサマリア人は、ユダヤ人に比べて劣りますが、 結局は南北どちらが総本山かではなく、主イエスは具体的に第三の道として、「御霊と真理」による新しい礼拝者像を提示し、「今がその時」救いに招きます。

「本当の」「まことの」「真理」は同語幹で、本書に 50 数回登場する鍵語ですが、 また私たちの信仰においても重要な要素で、真理と霊性は不可分の関係です。 聖書的真理はニコデモに、霊的率直さは女の方に、軍配が上がるでしょうが、 旧約律法の範疇で一方は理屈、他方は感覚で捉えていただけの五十歩百歩で、「御霊と真理によって礼拝」は、人間的知識や努力をもってしても捉えられず、 礼拝も出来ない方が創造主であることを示します。「聖書的礼拝」「霊性向上」 とは何でしょうか。限られた時間で熱心に聖書を読み祈り奉仕に励むことで、 それらが出来たかどうか達成度で、自分や他人の霊性を測ってはいませんか。 無意識に霊的と思しき事柄を結集する人間的努力に、終始してはいませんか。

私たちは主にあって何者で、どんな恵みが与えられ何を求められているか、 自転車操業をやめて立ち止まることが大事です。努力で実が結ばれるほど、 霊性は単純ではない。むしろこれまで励んできた努力も水の泡と化すほどに、 試練に遭ったり方向転換を余儀なくされると、聖霊の恵みが迫り力が抜けて、 今まで表面的努力で心の奥は温存し、自分が神を操縦してきた罪を悟ります。「己が身を神の悦びたまふ潔き活ける供物として献げ、心を更へて新にせよ」おの きよ か パウロ自身パリサイ人時代の失敗から語る、厳かな戒めです(ﾛﾏ 12:1-2 文語)。「あなたと話しているこのわたしがそれです」モーセへの顕現と同じ表現で、 御霊と真理による礼拝とは、御霊に打たれ真理を再解釈する出会いなのです。

7 月 12 日

「信じて変えられる」

ヨハネ 4:27～30

武安　宏樹　牧師

サマリアの女が主イエスに出会って、疲れ切った心をいやしてあまりある、永遠のいのちへ水が湧き出る泉を発見し、どのように変えられたかを見ます。28～29 節の言動が全てを表します。第一に汲みに来た水がめを置きっ放しに、第二に村八分同然で息を潜めていたのが、ロケットのように町へ飛んで行き、第三に淫靡な会話ばかりしていたのが、公然とただちに主を宣べ伝え始めた。町行く人は目を白黒させつつ、「来て見て」くらいならと軽いノリで足を運ぶ。「この方がキリストなのでしょうか」は確信の弱さではなく、判断は各自でと、立場を弁えた謙虚かつ賢明な判断で、男に鍛えられたのか機転の利く女です。「やって来た」は人々がゾロゾロと、主イエスへ移動が絶えない様を表します。

平成期とりわけ今世紀以降、わが国の受洗者数の頭打ち傾向が見られます。カルトへの警戒感や世の流れや少子高齢化の他に、教会や神学校が伝道より、教育に重心を移していることも一因と覚えます。伝道と教育は不可分であり、燃え尽きたり逸脱が減った一方で、「当たって砕けろ」的な鉄砲玉が減った分、直情径行型よりも、理知的でマニュアルに基づいた「賢い伝道」が増えてきた。以上は悪いことではありませんが、彼女はじめ悪霊憑きや重病人や求道者が、直後に献身を申し出たり、御名を言い広める即行動が聖書に多く見られます。よって感覚的な喜びや行動について、聖霊の実として是認されていると覚え、行動と学びどちらが先でも、聖霊の働きの中で包括的に捉えるべきでしょう。

ペテロが網を放(ほか)ったように水がめを放(ほか)り、パウロが光に倒れた直後同様に、ただちに宣べ伝え、ヨハネの荒野に叫ぶ声同様に主に人々を導く声となった。かくて聖書的に変えられた模範的キリスト者の要件も、全て満たしています。聖人代表ヨハネと俗人代表の彼女が同類項とは、主の前に全てが罪人ゆえに、信仰によって導かれた以上、聖霊は分け隔てせず水先案内人として用います。「ただ彼女は他の人々をキリストのところに来させるためのラッパ、あるいは鏡の務めを果しただけなのである。この哀れな女は聖なる熱心に燃え上がり、臆することなく自分の評判も気にかけず、キリストの名をほめたたえようとしたことは明らか」(ｶﾙｳﾞｧﾝ)宣教の主は素直に心開く者を尊く用いられます。

7 月 19 日

「主のことばに聞き入る」

ルカ 10:38～42

入江　告　師

「良きサマリア人」のたとえに続いて、マルタとマリアという姉妹が登場します。有名人であるイエスさまをマルタが自分たちの家に招きました。マルタはもてなしのために甲斐甲斐しく働き、ユダヤ人にとって美徳とされていた「旅人をもてなす」ことを立派にやり遂げようとしていました。一方でマリアはイエスさまの足元でじっとみことばを聞いている。その当時、先生から教えを請う弟子たちは決まって先生の足元に座りました。12 弟子の定位置がいまやマリアのものとなっています。まだまだ女性が教育を受けることは多くなく、周囲の人もマルタも、マリアの態度を怪訝に思ったでしょう。

最初は喜びに満ちていたマルタの心はやがて落ち着かなくなり、思い煩いへと発展しました。一人働かされているという怒りや寂しさがありました。イエスさまに意見するマルタは思わずイエスさまを責めるような言葉すら口にしてしまいます。教会で奉仕をする時、それが評価されず、損をしたような気持ちになり、奉仕していない人が楽をしているように見えるという体験をした方もいるでしょう。マルタの気持ちが分かります。

しかしイエスさまは、明確に唯一必要なものをマリアが選んだと述べます(42 節)。イエスさまが言いたいのはマリア派かマルタ派か、というような単純な二択ではありません。寧ろ、マリアの信仰をもって歩むことを強調されました。まずみことばを聞くこと。みことばを聞いて、心に温かな神の愛が注がれ溢れるのであれば、自然と平安と喜びの中に歩き出すことができ、奉仕も喜んでできるようになる。イエスさまはマルタにもその喜びの生き方を歩んでほしいと、愛の手を差し伸べたのでした。

7 月 26 日

「ともに喜ぶために」

ヨハネ 4:31～38

武安　宏樹　牧師

サマリアの女と主イエスの会話終盤に、弟子たちは町へ買い出しから戻り、多忙を気遣ってしきりに食事を促すも、逆に「あなたがたが知らない食べ物」を示されます。それは眼前に広がるスカル地方特有の黄金色の穀物畑でした。もし彼らの目に入ったなら、わざわざ町まで行く必要はなかったでしょうが、地元産を忌避か目が塞がれたことで、主はじっくり個人伝道に費やしました。この畑は比喩で、当地の民が波の如く押し寄せてくるのを、一言で言うなら、「飯の種」と形容します。主は決して人を物のように扱う表現はされませんが、弟子たちの魂に対する無頓着と視野の狭さを、気付かせるショック療法です。なぜなら「目を上げて畑を見なさい。」(35 節)の前に、「わたしの食べ物とは、わたしを遣わされた方のみこころを行い、そのわざを成し遂げること」(34 節)と挿入しつつ、視点を天と地をつなぐキリストの霊の糧を意識させています。彼らとしては眼前の畑より、自分たちの畑が芽を出すのを考えたでしょうが、夢や理想を追う前に、御心を求めることで「灯台下暗し」を示されたのでした。

「それは蒔く者と刈る者がともに喜ぶため」(37 節)アモスの預言の成就です。彼は南から北へ遣わされ、悔い改めなければ外敵に滅ぼされると警告します。かくて 50 年後にその通りになりますが、厳しい警告の最後に希望を語ります。同じダビデの末裔として、キリストにつながる南もそうでない北であっても、少しも変わることのない神の愛による回復が約束され、実際に初代教会では、当地にペテロとヨハネが遣わされ、豊かな刈り取りの実を目撃します(使 8:)。「一人が種を蒔き、ほかの者が刈り入れる」原則はあらゆる善行に有効ですが、功績を他人に譲り、モーセのように後継者に未来を託すのは難しいことです。莫大な霊的遺産を受けたダビデの子さえ、その葛藤について語ります(伝 2:)。目に見える結果で一喜一憂せず、同労者を励まして負うべき分は喜んで負う。これは摂理信仰がなければできません(伝 11:)。私たちは役割が与えられて、業を成す時間が与えられています。目立つ役職の人が完結できるのではなく、地味な人や前任者や共同体に流れる遺産により、実際は恩恵を受けています。自分が全て負うのでなく、協力と感謝で共同体に謙虚さと聖さが保たれます。人と比べずに神に与えられた恵みを喜ぶと、チーム全体の祝福となるのです。

8 月 2 日

「自分で聞いて信じる」

ヨハネ 4:39～42

武安　宏樹　牧師

女の叫ぶ声に反応して、サマリアの人々が大挙して主イエスを訪れました。彼らは女のメッセージ内容でなく、水を得た魚の如く再生した人格的変化で、心の奥に主を迎えて新しい人生が始まったことが、明らかに分かったのです。信仰による変化はセルフコントロールでなく、聖霊によるいやしと解放です。罪の道から悔い改めて心のベクトルが主に向くならば、立派なリバイバルで、キリスト者は似姿に変えられる歩みの中で、大なり小なりこれを経験します。彼らは救いの確信を得たので、主イエスを我が家へと熱心に引っ張り合って、滞在を二日間に延ばします。かくて彼らは第一に素直、第二に主体的でした。世では周囲の空気を見て行動しますが、信仰は聖書的原則と聖霊の働きを読んで動くことが大事で、彼らのようなフットワークの機敏さは大事です。そのためには日々の祈りと御言葉で直観的信仰を養い、行動することです。主イエスも次々に引っ張り回されながら、喜んで精力的に訪問したでしょう。「そして、さらに多くの人々が信じた」(41 節)そこに良い霊的循環があります。次のガリラヤの人間的見方による不振に比べ、信仰が多くの実を結びました。

一見すると 42 節はキリストを紹介した女に対して、失礼に聞こえますが、あくまで人々の主体的信仰にスポットを当て、他の話は割愛したのでしょう。「自分で聞いて」が強調部分です。彼らも女と同様にリバイバルを経験して、主と共なる新しい人生に導かれたと言いたいのでしょう。「世の救い主」とは、変革が自身に留まらず、世界宣教に目を開く聖霊の働きだからです(使 1:8)。原語「力」はダイナマイトの語源で、爆発力&破壊力&拡散力に満ちた種子が、信仰によって花開いて解き放たれ、聖霊は罪性を圧殺しながら理解と感動の、絶えざる爆発を繰り返しつつ、砕かれて私たちを主の似姿に変えていきます。以上を経験し、「神の栄光を顕わし、永遠に神を喜ぶ」(ウェストミンスター小教理問答 1)目的に導かれた人生となります。「自分で聞いて」「救い主だと分かった」は、過去の出来事から現在まで継続を意味する完了時制で、昨日も今日も明日も、何百回聖書を読んでも飽き足らない、聖霊による新しい理解に恵まれます。無限の神のことばは、特定の神学の範疇や聖書解釈のマニュアルに収まらず、私たちは入信~召天に至り、何を語られどう伝えるか頭がいっぱいなのです。

8 月 9 日

「何を見ているのか」

ヨハネ 4:43～45

武安　宏樹　牧師

難解な箇所です。故郷では尊ばれないのに何故わざわざ行こうとするのか。にもかかわらず人々に歓迎されるといった、話のつながりが何故か順接です。そこには合理性などの人間的見地を越えて、主のお考えがあったのでしょう。前のしるしで「イエスは、人のうちに何があるかを知っておられた」(2:25)と、サマリアの純真さに比べ、ガリラヤではしるしで信じる者が多かったようで、自分たちのために何かしてほしいという求めに、嘆息しておられます(48 節)。されどこの地も大事な宣教地です。反応の多少や深さや素直さにかかわらず、人間的見方によらず洞察と忠実さを養う上で、格好の弟子訓練となりました。素直に信じ切ることの出来ない人にも、福音を説いて求められたらいやしを、分け隔てなく接する主の姿に学ばされたはずです。弟子たちの故郷でもあり、派遣の地でもあり、要するにガリラヤの反応こそ彼らの原点ということです。

並行記事のマタイ 13 章前半に、有名な種蒔きの農夫のたとえ話があります。当初は喜んで受け入れても根付かない岩地や、行く手を阻まれる茨の地や、良き地に蒔かれる人もいる。いずれも終わりの日に主が実を選り分けます。人により地域により反応は様々ですが、どこでどのように実を結ぶのかは、人には分からないので、刈り取りの主に期待して種を蒔くということです。だからそのような記述はないにせよ、この話は弟子訓練がテーマではないか。彼らも主イエスに共鳴し、「何とうわべだけの信仰か」と斜に見たでしょうが、やがて主を捨て失格者となる者たちが、良き地に落ちた種などと言えるのか。所詮しるしを見ただけでキリストだと持ち上げ、その弟子だと粋がっていた、主を自分の救いのために利用しただけの、同胞たちと大差なしと自覚します。

朝に夕に種を蒔け、どちらが成功するかわからないのだからと(伝 11:6)、これは主イエスの公平な種蒔きの姿を表します。サマリアの純真な反応が、比べれば優れているように見えますが、ガリラヤは弟子を多数輩出しました。当初はうわべの信仰でも、主の愛と指導を受けて豊かに成長するものです。主イエスの目は尊敬されなかったり、しるしばかり求められ寂しく思う一方、されど尊い被造物たる人間を愛し、無限の可能性を秘めた存在と期待します。

8 月 16 日

「第二のしるし」

ヨハネ 4:46～54

武安　宏樹　牧師

百人隊長の部下のいやしの記事に一部似ていますが(ﾏﾀ 8:5-13/ﾙｶ 7:1-10)、彼は主との関係性における立場と、主がどのような方かわきまえていました。直接来なくても御声一つでとの信仰を、聞いた主イエスは驚き激賞しました。対する本書の場合は、依頼者である父親がしるしありきの未熟な信仰でした。死の淵にある愛息のために藁をもすがる思いで、苦しい時の神頼みであって、百人隊長が神に一線引きつつ謙虚かつ大胆に求めるのとは、雲泥の差でした。よって「百人隊長＞役人」と結論づけるのは簡単ですが、未熟ゆえもがく者を、主との個人的関係が確立されていないのに、断罪するとしたら酷な話です。「あなたがたは、しるしと不思議を見ないかぎり、決して信じません」(48 節)は彼だけでなく、しるしに終始して本当の恵みに与ろうとしない世の雰囲気に、究極的には世＆罪＆悪魔への叱責です。併せて主イエスは信仰を求めました。「行きなさい。息子は治ります」その言葉を受け入れ、彼は家路につきました。

それは渋々従ったのではなく、御言葉の約束に期待して「回れ右」しました。　立派な奇蹟です。最高の奇蹟はしるしや不思議以上に、罪の桎梏から解かれ、自ら 180 度向き直って、断絶された神との関係に橋がかけられることです。面白いことに可視的なしるしを求める者が、見えない信仰を与えられました。あやふやな御利益信仰者が、立派な御言葉信仰者へと脱皮を遂げたのでした。もはや百人隊長と遜色ない。未熟でも主に取り扱われたらそれでよいのです。客観的にはしるしを見て信じたとも言えますが、主観的には彼は信じた結果、しるしと不思議を見ます。父親の内面の変化が息子のいやしに結実しました。「治ります＝生きます」の原語は、本書で永遠のいのちの意で 50 回近く頻出し、主はしるしに留まらず、彼がいのちの恵みを受けることを願っていたのです。サマリアの女「その人の内で泉となり、永遠のいのちへの水が湧き出ます」は、内面のいやしだけでなく、霊的荒廃の町で叫び多くの回心者を起こしました。ガリラヤでも流れは同じで、神の超自然的介入に人が通り良き管となります。時刻の符合に彼は驚いたでしょうが、いのちの流れの観点から至極順当です。私たちも不可視から可視へ、信仰から証しへ、霊的な流れを注視すべきです。天の御国は川の流れから定期的に実を結び、世界をいやす所です(黙 22:1-2)。

8 月 23 日

「栄光から栄光へ」

Ⅱコリント 3:17～18

佐藤　賢祐　師

私たちに内住する御霊によって自由が与えられています。それは、自由奔放に生きていく自己中心的な自由でなく、考えや感情、行動の中心に、常に主ご自身がおられることで与えられる他者を愛する自由です。つまり、全てに主権を持っておられる真の神の御手の中で、私たちの歩みは育まれて、祝福されていくという、神の約束に基づく自由です。そこには、愛されるよりも愛するというキリストの心があります。

栄光という語は 315 回出てきますが、日常会話ではほとんど使うことのない語で「輝かしいほまれ。大きな名誉。光栄」と国語辞典にあり、成功や勝利などで得る好意的評価として用いられています。栄光と最も多く訳されている原語カベ―ドは「重大な、重荷、重いこと」の意。つまり、神の栄光とするならば、神さまにとっては重みのあることであり、そこに重要な神さまのご計画がある、ということです。

では、神さまにとって、もっとも重要なこととは何でしょうか？　聖書で一貫して語られるメッセージ、それは人の救いです。そのために神であるお方が人となり、この地に来られました。

「覆い」(18 節)は「黙示」の意で、ヨハネの黙示録には覆いが取り除かれた事実、イエスさまに明らかにされた事実が記され、１～３章に既に明らかにされた事実、４章以降にはこれから明らかにされる事実が記されます。イエスさまによって既に明らかにされた事実とは、十字架の贖いと復活の御業です。

私たちの生活環境は、物事や出来事に対する人間的な価値観で取り巻かれて形あるものは廃れ、やがて消えていきます。また、周囲の水準と比較してしまうと、優越感や劣等感に支配され、心のバランスが崩れてしまいます。

しかし、どのような状況に在ったとしても、私たちには、神の御手の中で決して廃れることはなく栄光から栄光へと輝き続けていくという、神さまが主体となる約束があります。たとえ周囲と比較してしまっても、自己卑下してしまっても、私たちは、神の栄光を顕わす一人として造られました。御霊によって、キリストの心が私たちの内にも造られ、たとえ外なる人は衰えても内なる人は強められ、日ごとに新しく成長させられて、イエスさまのように日々変えられていきます。ですから、私たちの思いを主に委ねて、御手の中で育まれる一日一時を、今週も共に歩んでいきましょう。

8 月 30 日

「死の陰の谷にて」

詩篇 23:1～6

武安　宏樹　牧師

本篇の構造は「たとえ死の陰の谷を歩むとしても～」(４節)を谷間として、サンドウィッチ状の並行法と読み取れます。その順で話を進めていきます。

①「所属」（１節前半＆６節後半）

「主は私の羊飼い」と冒頭で語るのは、自分が何者で誰に聴従する存在かが、最重要ということで、それによって地上的＆可視的事柄に囚われた霊性から、私たちは解放されます。主が先頭に来ていないと、思考も行動も揺らぎます。信仰は契約関係に依るので、神の前に何をするかではなく「どう在るか」です。御言葉から主との遠近感を捉えると、悪霊の動きや聖霊の助けが判ります。

②「充足」（１節後半＆６節前半）

「主は私の羊飼い」の結果として、「私は乏しいことがありません」となる。契約関係といえども奴隷の霊性ではなく、心身共に健やかに満たされます。「わたしはぶどうの木、あなたがたは枝」(ヨハ 15:3)ただ幹に繋がるだけでなく、果実が当然のように生まれ、収穫しないと腐るほどに豊かな実が生まれます。

③「糧」（２節＆５節）

主の祈りにあるように、日毎の糧を通し主は満たしを与えてくださいます。敵を前にして主が備えてくださるのは、飛び道具ではなく日常的な恵みです。上げ膳据え膳＆あふれる杯に酔いしれ、主は十字架の前夜祭を敢行しました。

④「義と回復」（３節＆４節後半）

「生き返らせる」は、「向きを変える」「悔い改める」「捕囚から帰らせる」意で、以上の①②③の順に、主のものとされ恵みに与っていることを心底理解して、それから義と回復が導かれます。悔い改めすら自分の決心でなく主の御業で、羊飼いなる主は柵の中の羊に対して、罪や逸脱の全てに贖いを適用されます。

⑤「試練と臨在」（４節前半）

義の道の行先が死の陰の谷なる十字架なら、決してハッピーな道ではない。本項が谷間に位置するのは、谷底でも「あなたがともにおられますから」と、勇敢さや経験値ではなく、いかに臨在信仰を告白できるかが大事だからです。苦難が信者を成長させます(ロマ 5:3-4)。この谷で主の取り扱いを受けながら、それでもそこに主が導かれるなら向かうのが、羊であり羊飼いの生き方です。

9 月 6 日

「くれる人がいません」

ヨハネ 5:1～9a

武安　宏樹　牧師

主イエスは祭りのため上京すると、病人たちがベデスダ池に先に入ろうと、地獄の如き絶望からいやしの彼方にある天国を待ち望み、争っていました。病も程度がありますから、足の丈夫な者、家族など助けの人脈を有する者が、先に抜けていき、非情にも重病人や我先を是としない優しい者ほど残る訳で、その最たる者が 38 年も闘病中の彼でした。この歳月は約束の地に入るまでの、荒野の旅と等しいですが、絶望していたのか無意味な希望を抱いていたのか、「良くなりたいか」主の問いかけに、周囲は愚問としか思えなかったでしょう。

この質問には「Yes」「No」で答えるべきですが、著者が割愛したのでしょう。「それは良くなりたいですよ。良くなりたいけれども･･･」が隠されています。7 節の語順は「主よ。人がいません･･･」彼の一番の苦しみは孤独であって、誰かいなければ生きていくことができない、他の病人同様に依存的でした。家が貧しかったから、親の教育が悪かったから、自分が勉強しなかったから、こんな悪い人生になったと、誰かをのろいながら生きるのは空しいことです。神の作品とされた以上、本来は自立した存在として達成感得て生きることが、期待されている。それは健常者であろうが障碍者であろうが変わりません。主イエスは偶然ではなく、最も世で不遇をかこっている彼を選ばれました。こんな私に関心をもつ方がいるとは。この時点で彼の心は開かれていました。

「起きて床を取り上げ、歩きなさい。」先のが愚問なら、こちらは無謀です。人への依存を捨て自力で起きよ、それだけでなく絶望の床を捨てよと言う。「取り上げ」は過去形で一回完結、「起きる」「歩く」は現在形で継続的意味です。以前は想像だにしなかった、絶望の壁を打破して別人のように新しい人生を。この無謀に見える命令を彼は受け入れて、その通り「すぐに」歩き出しました。そこにはかつての病人としての暗い影も、依存も羨望ももはや存在しません。それはイエスの御名によっていやされ、自分の力以前に神に支えられて立つ、高慢にも不安にも陥らず、主に栄光を帰しながら喜んで謙遜に生きる故です。「良くなりたいか」は健康＆健全の意。健全な主の教えが病人の健康に必要で、病の苦しみと孤独を知る方が、深いところから臨在といやしを現されます。

9 月 13 日

「待っている神」

ヨハネ 5:11～24

武安　宏樹　牧師

放蕩息子のたとえ話は、そもそもは兄息子の方に力点が置かれていますが、本日は弟息子の方に焦点をあてます。法律上では勝手に財産の分与が出来ず、父が退く場合のみ生前分与が認められました。弟は厚顔にもこう言い放った。「父さんが死んだらもらえる分を今よこして、家を出て行かせてください。」ところが意外にも父は与え、案の定使い果して食うにも困ります(13-14 節)。こうなる結果は分かっていたのに、それを承知で送り出したのは何故なのか。止めても屈折するだけで成長にならない。父は子に自由意志を与えたのです。

当初は粋がっていても、そのうち何も出来ない見通しの甘さに気づかされ、家を出た手前それなりに頑張るも、それでどうにもならない無力を痛感する。彼はここで「我に返った」(17 節)。別の訳では「本心に立ち帰る」とあります。願い通り父から離れても、その間に本当の自分からも離れてしまったのです。けれども一つだけ開いている道がありました。それが父から迷い出た道です。自分が間違っていた。散々心配かけた。「どの面下げて」と怒られていいから、とにかく家に帰ろう。それが居るべき場所だ。身分などどうでもと覚悟した。

されど父は首を長くしてずっと待っていました。まだ遠く離れているのに、息子と認めたのはそのためです。自ら駆けよって接吻はあり得ない話です。父は帰って来ることを分かっていた。迷惑ばかりで祝福されるわけないのに、父が一方的に喜んでくれた。こんなにも愛されて大事にされていたのだから、これまでのような自分中心の生き方を止めよう。そして父さんの喜ぶような、新しい人生を送ろう。これが自分のあるべき姿なのだと、子は気づきます。　主は大きな御手の中で、在るべき所に戻って来るのを心待ちにしています。

父は子を捜しに行かず、ずっと帰りを待っていた。失われた者を捜すため、天の父は御子イエスさまと御霊を送り、死んだ同然の人々の帰って来るのを、大きな喜びをもって迎えてくださいます。神との愛の交わりの回復によって、自分の在るべき姿を取り戻すことができる。愛想尽かさない愛に感謝しつつ、投げ出されたような人も、晩年に知る人も、そして出て行った人に対しても、必ず帰ると信じ立っている。父の愛によって失われた魂のため祈りましょう。

9 月 20 日

「父が働かれるので」

ヨハネ 5:9b～18

武安　宏樹　牧師

病と罪で絶望していた者が、キリストと出会っていやしと解放を得ました。そうして救い&いやし爆発ならば、聖書は「信仰があれば何でも出来る」的に、ハッピーな書物でしょうが、同時に救い主の処刑という「あってはならない」ストーリーであり、教会も信仰生活も起伏に富む「His Story」が展開します。「ところが」で舞台は暗転し、いやしを良く思わない者たちが難癖をつけます。彼らは人を断罪せんために、律法を恣意的に細則で権威付けをしていました。けれども律法は本来は誰でも理解でき主体的に適用すべき法です(申 30:14)。

何とかして安息日を守ろうとする熱心さは評価すべきですが(出 20:8-11)、残念なことに神に目を向けるのを忘れ、遵守自体を目的とし法整備したので、偉い人たちのものとなってしまった。聖書の記述を聖霊によって解釈せずに、人間的方策で近づこうとすると、本質を見失い都合の好い解釈と堕します。可哀想なのはいやされた本人です。喜んでいたのに誰がこんなことをしたと、偉い人たちが目を吊り上げて取り囲む。安息日ゆえに遠慮すべきだったのか。一世一代の好機に御言葉に従ったまでで、彼らの矛先は主イエスに転じます。

恐れる彼を主イエスは見つけ「あなたは良くなった。」(14 節)と励まします。彼は名前をユダヤ人に伝えたことで、主イエスは危険な状況に置かれます。それを承知で名乗ったのは、身の危険よりも彼の平安を願ったからでしょう。主イエスは救いを求める魂を放置できないがゆえに、彼らの間に入りました。それ以上に本書はいやしの御業の彼方にある、安息日の決定権を論点にして、主イエスは神の子ゆえに安息日は自分が決めたと主張して、宣戦布告します。父が現在進行形で働いておられるので、休む訳にはいかないということです。

重要なのは「なさっていたすべての創造のわざをやめられたから」(創 2:3)の意味で、私たちは神が 6 日間で疲れて休憩していたと勘違いしがちです。「神が休んだのは創造の業だけで、愛とあわれみの業は続けられた」(ﾊﾞｰｸﾚｰ)よって安息日は特別に主を見上げるための日で、これは律法以前に喜びです。今日コロナ下で礼拝を守る意味を、何が証しになるかから考えさせられます。信仰の主体性が安息日に始まることを、主は救いといやしの業から語ります。

9 月 27 日

「子にお示しになる」

ヨハネ 5:19～23

武安　宏樹　牧師

主イエスは安息日にいやしを行ったことで、ご自分が律法に拘束されない、神の子であることを明らかにし、このことは神の代理と自称するユダヤ人が、顔に泥を塗られたように感じられましたが、それは喧嘩を売ったのではなく、ご自分が何者か明らかにすることで、彼らに真理だけでなく愛を示しました。構造的に 19 節が主文ですが、父と子が一体&同格であることが強調されます。「自分から何も行うことはできません」人間的にロボット&指示待ちの人を、想像しますが、そういう人は成育歴で創造性や社会性が欠如している問題を、抱えています。自身を肯定的に評価し他人から学ぶことで、人は成長します。とはいえ以上完璧に出来る人がいないのは、「的外れ」「ゆがみ」「そむき」など、自己中心の罪に端を発する罪の諸相が、キリスト者も例外なくあるからです。

それでは主イエスは人間の形をしたロボットかというと、そうではない。人のような罪が存在しない以上、主に仕える主体性と御心を行う一体性とが、完全なのです。「それは、父が子を愛し」(20 節)この愛は「兄弟愛」の原語です。背を向け続ける罪人に命がけで手を差し伸べる愛、その究極が十字架です。だから「自分から何も~」とは彼らが勝手に作った細則で律法を骨抜きにし、救われるべき人が救われず、父を見ようともしない暗い霊性への皮肉です。その愛とは、父がたとえ放蕩息子であっても愛し、寄り添ってくださる愛で、父の愛を正面から受け止めるには、砕かれて素直になり「明け私」すること。放蕩息子のたとえ話で言えば(ルカ 15:)、ユダヤ人たちは兄の立場になります。私たちキリスト者も父から離れていない以上、弟よりも兄の方が身近です。

兄が真面目に働いたのは素晴しいですが、評価されないとヘソを曲げて、奴隷のように酷使されて何もくれなかったと、怒りの感情しか残らなかった。私たちもそういうことがあるのではないでしょうか。父はどう受け止めたか。「いつも一緒」「全部おまえのもの」神が主イエスに表した兄弟愛に訴えます。兄は自分なりに一生懸命仕えながら、受け取るべき恵みに見向きもしないで、父は何もしてくれないと、まさに的外れでゆがんだ思いに苛まれていました。主イエスはユダヤ人を前に、ご自分を通して表される神の愛を示したのです。荒野 40 年&捕囚 70 年の辛苦も寄り添いつつ、約束の地へ行こうと誘うのです。

10 月 4 日

「死からいのちに」

ヨハネ 5:24～29

武安　宏樹　牧師

本章に登場する病人は弱さと死の近さを感じ、柔軟な心を持っていました。されど「ユダヤ人たち」は捕囚を通して、それまでの偶像礼拝の罪を悔い改め、宗教的レベルは向上しましたが、律法追求が高じて自己義認へと陥りました。亡国の民となって深く傷ついた一方で、目に見える救いを求めていたので、民族主義的＆自己中心的な心により、皮肉にも別の偶像礼拝へ籠絡されます。十戒は前半の宗教規定と後半の社会規定で成り、前半が後半に影響しますが、刑法に問われない第 10 戒「貪欲」は、遡って全ての罪の底流となるものです。ユダヤ人は優秀な民族ですが、律法を通して貪りの罪を犯しました(ｴﾍﾟ 5:5)。

果して律法は文字によって人を縛りつけ、違反したり高慢になることで、リトマス試験紙のように、罪を浮き彫りにする忌まわしいものでしょうか。盲点なのは、十戒の諸規定に先立つ前文で救いの事実が明記されることです。つまりユダヤ人が律法の彼方に救いを考えるのは、とんでもない誤解であり、まず救いがあって、救われた者が幸いに生きられるように律法があるのです。どちらが律法を愛することが出来るかといえば、言うまでもなく後者です。御言葉を近くに感じることが出来るのは、救われた者が感謝するからこそで、律法に生きようとする者が死んだ者となり、死んだ者は恵みに生かされます。

そこで霊的に死んでいるユダヤ人に、どのように愛を示すことが出来るか。それが神が人となり彼らの目の前に現れることでした。共に歩んできた民が、未だに神の愛を知らないことを不憫に思い、律法の真実を知ってほしいため、御子を遣わされたのです。モーセ辞世の句はここに成就します(申 30:19-20)。されど一筋縄でいかぬ彼らに対して、今すぐ信ぜよと強迫してはいません。けれども信ずるならば彼らが心の底で求めている、永遠のいのちを与えよう。「今がその時です。聞く者は生きます。」(25 節)と信仰による告白を求めます。もう一点、主が来られたのは終わりの日へのカウントダウンということです。それは律法を隠れ蓑に人を自己中心に縛り付ける、罪と悪魔へ滅びの宣告で、この戦いに関してパウロは霊的武装を勧めます(ｴﾍﾟ 6:)。霊的戦いとは己に恃む者が倒されて、信仰と真実と愛に依り頼む者が勝利する喫緊の戦いです。

10 月 11 日

「証しする人生」

ヨハネ 5:30～36

武安　宏樹　牧師

本日の箇所に「証し」「証言」の原語が 9 回、本書では 40 回登場する鍵語です。証しといえば救いや恵みなど、自分の体験を交え自由に語られるものですが、主は昇天後に焦る弟子たちの心を見透かすように、聖霊が降るまで留まれと、証しは人の努力で実を結ばず、聖霊無しに何も出来ないと語ります(使 1:8)。罪のとがめなく主とつながっているか、天からあふれる力を受けているか。証しも諸奉仕も、祈りをもって始めるとは銃に弾を詰めて備えることです。けれども力を受けて喜んでいるだけでは、子供が銃を振り回すようなもので、この力には矢印がついています。その一つは私たちの身近な地域だけでなく、未だ見ぬ世界の果てまで地理的な拡がりです。御言葉は世界に届く弾丸です。

もう一つは力や拡がりに比べて忘れがちですが、「わたしの証人」(使 1:8)となることです。証しと称し自分のことばかり語るのでも、感動するような聖書の話をするのでもなく、どこを切っても主の似姿が現わされることです。これには試練にもめげず、反対者にもキレず、難しい人にも愛を惜しまない、語る以前に人格的成長が必要です。主は信者との関係をぶどうの木にたとえ、「わたしを離れては、あなたがたは何もすることができない」(15:5)と言われ、これは父＆御子の関係をそのまま私たちに求めています。以上を極めたのが、バプテスマのヨハネでした。彼は露払いとして絶えず背中に主を意識しつつ、歩みを進めるキリストの証人の模範です。この謙虚さこそ非常に大事です。

彼は「燃えて輝くともしび」として、光の源なる神をたいまつのように灯す人生でした。無残にも斬首されますが、「証し」に殉教に至る意味もあります。必然的に私たちもヨハネやステパノのように、血を流すことが求められます。極論すれば証しする人生イコール血を流すこと。それで主の似姿が最大限に現わされます。とはいえ平和な時代には文字通り血を流すことは滅多になく、それが何か考えることです。主イエスはご自分だけでなく父も証しされると、言われます。主イエスと聖霊も相互に証し(14:26)、三位一体的関係の中に、父＆御子＆聖霊が手を取り合うただ中で、私たちは証しを全うできるのです。変化を好まぬ肉の部分にメスを入れ、痛みと共に証し生活が始まるのです。

10 月 18 日

「神の家ベテル」

創世記 28:10～19

佐藤　賢祐　師

①ベエルシェバからハランへ

後にイスラエルと呼ばれるヤコブの生涯で、彼の信仰の起点となった幾つかの場所に、神によって意味のある名前が付けられていて、ベテルはその一つです。ベテルとは「神の家」という意味であり、ヤコブの信仰生活の起点となった所です。彼は母リベカと共謀して兄エサウを騙し、その復讐を恐れつつ、叔父ラバンのいるハランへ向かいました。杖一本だけ持ち、逃げるように朝早く旅立ったヤコブは、早朝から約９０キロを歩き続けて、日が暮れたその場で石を枕にして眠りました。本来なら叱責されるべき状況で主は夢に現れて、彼は信仰告白へ導かれました。

②ベテルにおける信仰告白

一つのはしごが地に立てられ上の端は天に届き、神の使いたちがそのはしごを上り下りしていました。その上に立っておられた主が、ヤコブに語られた内容は、「あなたが横たわっているこの地を、あなたとあなたの子孫に与える。あなたの子孫は地のちりのように多くなり、地のすべての部族はあなたによって、またあなたの子孫によって祝福される。わたしは、あなたとともにいて、あなたがどこへ行っても、あなたを守り、あなたをこの地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを成し遂げるまで、決してあなたを捨てない。」(13～15 節)という祝福の言葉でした。ヤコブの両親イサクとリベカは、真の神を信じていましたから、幼少期から両親と一緒に神への礼拝を捧げて、家で神さまの話を聞かされてきたと思われるので、頭では理解があったと思います。しかし、眠りから覚めたヤコブの冒頭の言葉は「まことに主はこの場所におられる。それなのに、私はそれを知らなかった」（16 節）「この場所は、なんと恐れ多いところだろう。ここは神の家にほかならない。ここは天の門だ」（17 節）でした。

③神に祝福された者として

ここに主はおられないのではないか・・・と思われる所や、出来事を目の当たりにする時があります。しかし、そこにも主はおられ、主はその場所で、愛と慈しみに溢れる神の素晴らしい御業をあらわされていくお方です。私たちがいるこの場所もまた神の家であり、天につながっていく天の門です。だから日ごとに立ち止まり、主に与えられている信仰を告白しながら、今週も主と共に歩んでまいりましょう。

10 月 25 日

「何を受け入れるか」

ヨハネ 5:37～47

武安　宏樹　牧師

入信に際して「キリストを受け入れる」とよく言われます。伝道トラクトに、信じた暁にこんな素晴しい変化が起こり、成長すると御霊の実が(ｶﾞﾗ 5:22)、そして御子があなたの罪のため死なれた以上、決して救いから落ちませんと、救いの効果の美辞麗句に半信半疑(!?)で信じて、結果的に看板に偽りなしと、胸を張って言えますが、我が身を省みてその通り生きているか探らされます。「受け入れる」とは「人の言うことを承認する」と広辞苑にあり、要するに人に限らず言葉や事実など対象が前提となります。とはいえ、私たちが自動的に、どんな人も言葉も事実も受け入れられる訳ではなく、自分の方で折り合いを大なり小なりつけなければなりませんが、時の経過と共に心が変わることも、人生経験の中で別の視点が与えられ、受け入れるに至ることもよくあります。そういうわけで受け入れるとは、対象と共に自分の器の広さや洞察も問われ、相手と上か下かを争わない謙虚さや物事を見分ける鋭さなど、数字や名誉に現れない人格的な総合力、信仰の次元で換言すれば霊性を求められるのです。

本日の箇所を要約すれば、ユダヤ人たちは旧約律法に永遠のいのちを求め、真剣に聖書研究している彼らは、モーセ律法の正統な継承者と自負しますが、眼前のイエスという者がキリストだとは、どうにもこうにも受け入れられず、彼らの神学を破って安息日に働く不届き者など論外と、拒絶感を露にします。対する主イエスは決して彼らの聖書研究を否定せず、その彼方にキリストを、見出せずにモーセ信仰やヨハネ信仰で止まっていることに、痛痒を感じます。彼らの神学は立体的に十字架の主が橋渡しする、天の奥義の知識に到達せず、平面的に人間界で堂々巡りしながら、絶えず誰が偉いか背伸びし合っていて、律法の専門家に安住しつつ、常に喝采を受けて自分の立場を保ちたいのです。これは王座に固執するサウルや、保身に走るピラトに通じる悪魔的霊性です。「わたしは人からの栄誉は受けません」(41 節)とは、両者が相反する皮肉です。私たちは「自分中心」「キリスト中心」の二者択一を迫られ、後者を選びました。それは知識で神に到達したからではなく、眼前の主を前に受け入れたのです。肉の性質は聖霊の働きと絶えず争うも、それは救われていないからではなく、恵みが莫大なので収納しきれず、器が更新されつつ聖化の過程にいるのです。

11 月 1 日

「有り余る祝福」

ヨハネ 6:1～15

武安　宏樹　牧師

この奇蹟のみ四福音書全てに記されており、それだけ重要視されています。たった５つのパンと２匹の魚で、腹を空かせた 5000 人に何が出来るでしょう。古来から各自が弁当を忍ばせていたとか、霊的満腹とか説明がされましたが、旧約時代にマナが降ったように(出 16:)、奇蹟はそのまま受け取るべきです。主の祈りにあるように、神は霊的恵みだけでなく糧も豊かに備える御方です。ゾロゾロ随行する群衆を食わせる義務は無いので、弟子たちは解散ばかりを考えていましたが(ﾏｺ 6:35-36)、主はピリポに「どこからパンを買って来て」と提案します。最初から買いに行かせる気は無いのに、鎌かけるのが面白い。地元民ということで購入の情報や人脈を駆使する、現実的対応も取れますが、5000 人に供給すれば 200 デナリ(＝100 万円？)と、彼は算出したに過ぎません。アンデレは弁当のある少年を連れて来るも、「それが何になるでしょう。」と、彼の方がピリポより優れた反応とは言えません。主はピリポを試したことが、ポイントです。敢えて彼を選び、数字を通して栄光を現そうとされたのです。

２匹と５つ、200 デナリ、5000 人といった具合に、数字が多く登場します。前二つはアンデレが用意し、後二つはピリポが算出。両者とも働いたのです。最初から応ずる気が無ければ、それは無理ですと断ればよかった話でした。そして数字が出たことで、このテストがどれほど無茶な話か把握できました。総力結集しても焼け石に水。しかし再確認すべきは「ピリポを試す」目的です。無茶な数字と知り「お手上げです！」と告白してから、主は行動を開始します。彼らは苦笑しながら応じたでしょうが、主は希望の微笑をもって指示します。そこから御業が始まりますが、ピリポらに御自分を見てほしかったのです。乏しいから駄目でなく、乏しいものを積極的に用いて感謝の祈りをささげて、天の神が恵みの管として幾千倍に用いられるのを、見てほしかったのでした。この祈りから私たちも学ぶことです。土の器が敢えて選ばれて用いられます。モーセのように祈りの手を挙げながら、１が 5000 になる祝福を味わうのです。その後のことはもっと重要で、奇蹟の目的はショーでなく与えるためでした。祈りの手の背後に民の救いがかかる責任感から、愛の奇蹟が生まれたのです。主イエス＆与える者＆与えられる者が一つとなる、実物教育がなされたのです。

11 月 8 日

「恐れの彼方に」

ヨハネ 6:16～21

武安　宏樹　牧師

5000 人給食の話ではピリポ＆アンデレは奉仕者として、群衆が伺い知れぬ、自分の精一杯を尽したところで届きようもない領域に、天からの恵みが働く、奇蹟のメカニズムを知ります。その後に主は山へ、弟子たちは湖へ出ました。「わたしは祈りに専念するから、あなた方で湖を渡りなさい」教育的配慮です。前回の給食と違って、主が居られない中でどこまで彼らの力で乗り切れるか。漁師もおり湖の天候の苛酷さは承知ですが、御言葉に従って漕ぎ出しました。 彼らが嵐と格闘しながら何を思ったのか、記されていないので判りませんが、主を忘れていたのではなく、離れていては呼びようがないと諦めていたのか。「求めよ、さらば与えられん」(ﾏﾀ 7:7 文語)の理解に未だ達していなかったので肉体をもって同席せねば不在と感じ、格闘に明け暮れていたのが実際でした。

ポイントは主を正しく呼び求めるに至らない、この格闘に意味があるのか。舟に乗り込む前から、嵐が吹きすさぶ前から、呼べば応えられると確信して、最後まで弟子一同が励まし合い平安を保つことが、模範解答かということで、逆に言えば何があっても泰然自若で居なければ、弟子失格なのかということ。それはたしかに素晴しい信仰ですが、最初からそんな者は誰もいないことを、主はご存知で、失念したり反抗したりしながら主がどういう方か学ぶのです。キリスト者＝聖徒と呼ばれますが、主の聖を学ぶのは一生涯かかることです。時に罪を犯したり主をうらんだり弱音吐くとも、それで愛されない訳でない。対する律法学者たちは模範解答でなければ救われないと、神の愛を歪めます。自分の弱さを受け入れるとは、神の愛の深さ広さへの確信から来るものです。

だからこの嵐の話はまさしくキリスト者の人生と、断言できると思います。彼らの舟は距離にして７割方近づいて、目的地残り２ｷﾛが眼前に見えました。そこまで頑張ったけれども力尽きて砕かれる瞬間を、主は見極めていました。「あれは幽霊だ」(ﾏﾀ 14:26)と失礼なことを言ったのも、精神的限界からです。そんな時だからこそ主の愛がどういうものか判り、霊的に一皮剥けるのです。人間的に恐れないのではなく、全能の主が共に居られるゆえ恐れないことを、離れた場所でも変わらないことを生涯学んで、私たちはゴールに到達します。

11 月 15 日

「永遠に朽ちないもの」

ヨハネ 6:22～27

武安　宏樹　牧師

「五餅二魚」後に雲隠れした主イエスを、群衆たちは対岸でやっと見つけて、自分たちの王にしようとする不純な動機にも関わらず、主は福音を語ります。食という根源的欲求の満たしを足掛かりに、深い霊性の問題へ引きつけます。「人はパンだけで生きるのではなく～」(申 8:3)パンの「ために生きる」ことと、パンを「通して生かされる」こととは、似ているようですが全く正反対です。この箇所を主が悪魔に引用しましたが、かりに石がパンになるよう命じたら、 神のことばもパンには勝てず、無しに生きていけないと証明することになる。物質的貧困が克服されても、人は何のために生きているか空虚感を覚えます。もちろん「日用の糧」は必須ですが、これさえあればと錯覚する全てのものや、通常は信仰者に然るべき報いと思われる、「常喜祈感謝」と明記されたものも、私たちが先取りして自分の幸せを願う結果を求めるなら、それは的外れです。食品も肩書も健康も奉仕の祝福さえ、今日うまく運んだことが明日も同様と、それでは明日のパンを得るために、踊らされて生きてはいないでしょうか。以上挙げたものは喜んで受けるものですが、主語に誰が座るかで一変します。

主の祈り「日用の糧を与え給え」とは、まさにこのためにあるのではないか。生活必需品と思われる全てが努力の結果ではなく、必要に応じて主が与えて、それ以上は心配＆固執せず、絶えず神の摂理の下に置き給えという告白です。つまり自分を主とすることを拒否し、主が座すように悪魔を退ける祈りです。マタイ 6 章で主の祈りに続き、「自分のいのちのことで心配したり」(ﾏﾀ 6:25)しないようにとの戒めが語られます。ここで異邦人とは群衆たちが志向する、朽ちるべきものが生涯年金のように支給を願う、空しい人生を差しています。「朽つる糧のためならで、永遠の生命にまで至る糧のために働け。」(27 節文語) それは神のことばと御摂理の中に、生活の必要全てを置いて生きることです。前置詞「至る」は方向性を表すので、その暁には人生の目的まで見えてきます。神中心に生きるときに、混沌としていた生活の雑事に調和がとれてきます。キリスト者は証印を押された者として、永遠を想う聖い人生が備えられます。欲望も心配もあれど、支配されない信仰生活を選べるのは何と幸いでしょう。主イエスは常に生活の心配をし、明日を思い悩む者を深く憐れまれるのです。

11 月 22 日

「天から下る恵み」

ヨハネ 6:28～33

武安　宏樹　牧師

働きなさい」(27 節)と聴いた群衆は、神のために善行を積み上げた暁に、永遠のいのちに至ると誤解しました。この動詞と名詞形「わざ」が繰り返され、本日の箇所は、救いのため何をすればよいのかという重要な教理を扱います。彼らの問うた「神のわざ」(28 節)は複数形で、もろもろの善行を意味しており、実際に善良かつ道徳的な生活を送れば、神の恵みを受けると考えていました。この考え方は他の宗教と同じで、いわゆる「doing」で罪意識を克服するため、果てしなく終わりが見えない救いを求め、取り組む律法が多ければ多いほど、救いの確信は薄くなります。偉そうなパリサイ人たちも心の中は空虚でした。ニコデモの来訪は自覚ゆえです。主イエスは天と地の隔絶を厳然と語ります。「だれも天に上った者はいません。」(3:13)努力の積み重ねでは天に届かない。上に向かうベクトルでは罪人は救われず、天から下られた主とつながるなら、主が引き上げてくださる「下向きの救い」。それがわたしだと宣言されました。天地がひっくり返るほど、他の追随を許さない革命的な救いがキリストです。天の御国は遠い彼方でなく目の前、いや証印を押されて我が内にあるのです。

主イエスのお答え「信じること、それが神のわざです。」(29 節)前節に対し、こちらは単数形、すなわち天の御国までは千里でなくたった一歩のみであり、神が差し出した右の手に自分の手を添えて握り返す。無条件に満面の笑みで、差し出された手を「ありがとうございます。」と言って握り返すだけなのです。ユダヤ人は握り返すどころか拳を固めて殴りつけた。そこには愛を拒絶する頑迷と誤解がありました。人間関係でも愛情と励ましと含蓄に満ちた言葉を、素直に受け入れるなら信頼を構築できますが、曲解したり揚げ足を取ったり、恩を仇で返すような人は、深い部分で傷ついているがゆえに防衛本能が強く、心の柔らかさが失われています。彼らは自分の目で奇蹟を見たのにも拘らず、モーセ同様にマナを降らせたら認めてやってもいいと、不遜にも放言します。けれども主イエスは彼らの期待を退け、与えるのはモーセでなく父からだと、マナは肉体の必要だけだが、わたしの糧は渇いた霊を満たすと言われます。「わたしの父が、与えてくださる」は信じる者に現在進行形の恵みのことです。信仰生活は行いによるのではなく、信頼関係がその人の行いを変えるのです。

11 月 29 日

「終わりの日に向かって」

ヨハネ 6:34～40

武安　宏樹　牧師

主イエスは群衆に奇蹟を見せることで、御自分が神の子であることを証し、さらに旧約時代のマナと新約時代のパンを比較しながら、信仰による一歩を、対話形式で答えながら丁寧に紐解きます。対する彼らは真理を熟考ではなく、生涯の飯の保証という人間的欲求から、ぶら下がった人参を離さぬ勢いです。逆に言えばパンの供給無くば無意味という、サラリーマン信仰者の在り方で、やはり何かを行う対価で何かを得るとの、世の流れから抜け出せていません。そんな彼らに、いや私たちに対しても「わたしがいのちのパン」と言われます。主のため何かするのでなく、主と共に生きる。第一段階は「主のもとに来る」ただ来るだけでなく共に居ることも含むので、第二段階「信じる」も伴います。それはキリストの名の中に、人生丸ごと投げ入れる決断を意味します(1:12)。近くまで来ていても報いが無ければ離れようと思うのが、悲しいかな群衆で、それを見越して「信じる者はどんなときにも、決して渇くことがありません。」と宣言されました。働いても徒労を感じると空しさを覚えるのが人の常で、不条理と感じると止めたくなりますが、そんな時でも渇かないと言われます。

ちなみに「渇くことがありません」は未来形で、この世で終わらない恵みを、語ります。御国の価値観で生きると、人間的報いに依らずとも満たされて、自分の罪や弱ささえ恵みが力強く適用される機会となります(Ⅱｺﾘ 12:9-10)。パウロに関して言えば自分から来た以前に、主から選ばれて信じた者でした。選びは神の専権事項ですが、私たちが救われキリストにつながり続けるのは、常に聖霊の働きがあるからです。そして彼らも選ばれて主と出会った者です。「わたしは決して外に追い出したりはしません」敢えて言われたのは何故か。先達が捕囚の民へ追いやられて、不信感という傷があったかもしれません。だから主は約束の地は地上ではなく、終わりの日のよみがえりにあることを、わたしを信じて御国の民になろうと、彼らの目を天に向けさせているのです。「キリストは私たちに手を差し伸べ、道の途中で私たちを置き去りにしない。私たちは、彼の導きのもとに保証され、大胆に目を最後の日に向けることができるようにされている」(ｶﾙｳﾞｧﾝ)拒絶されたように感じる傷はいやしを求め、されどなかなかいやされないなら、終わりの日に主が理由を明らかにします。

12 月 6 日

「いのちのパン」

ヨハネ 6:41～51

武安　宏樹　牧師

ガリラヤ人とは明らかに別の人種の、理屈っぽいユダヤ人がパン問答から、文句をつけ始めます。彼らは聖書に精通しながら救い主を認識できなかった。原語「引き寄せ」は重い物を引きずる意ですが、救いの御手に対する抵抗力が、彼らの内に働いていました。主イエスはご自分を差して「天から下って来た」「生ける」(41.48,51 節)パンを食べよと三度宣言するも、悪魔も身震いします。「食べると死ぬことがありません。」「食べるなら、永遠に生きます。」と聞いて、エデンの園での禁令を想起します(創 2:9,16-17)。他の全ては大丈夫なのに、なぜ知識の木のみ駄目なのかという疑問で、悪魔は巧妙にエバを籠絡して、御言葉理解の隙を突き、「あなたがたは決して死にません」大嘘を吹き込んで、さらに「目が開かれ」「神のようになり」「善悪を知る者となる」効果を提示し、遂に陥落に成功し、神の命令を破った人間は園を追われ死ぬ者と化しました。死とは、①肉体の寿命、②罪による神との交わりの断絶、③永遠の滅びです。けれども神はなぜ知識の木だけ禁じたのか。そして悪魔を泳がせていたのか。罪の原因はエバが神の代わりに答え、悪魔が不死を騙った「越権行為」でした。

越権行為とは与えられた権限を越えて、身分不相応な行いをすることです。直属の上司を無視して他所の言うことに従えば、信頼関係に亀裂を生みます。自分は誰の権威の下にいるか、仕事の全体を把握して何が求められているか。これは社会経験以前に、家庭で如何に親子の信頼関係が育まれたかが出ます。自分の選択が全て正しいとは思わなくとも、結果的に傷つけたり信頼を失う。分かっていないのに知ったかぶる。それは私たちの霊性に歪みがあるせいで、罪の性質の実際です。知識の木は御言葉に従い避ければ幸いな実を結ぶのが、自分を神とする悪魔に従ったことで、自分本位に人生を制御するようになり、次に当初は禁じられなかった「いのちの木」に、手を伸ばすのは明らかでした。そこで神は時が来るまで、その道をケルビムと炎の剣によって封鎖しました。人間は不従順で知識の木を駄目にして、自分本位に生きる道を選びましたが、反対に「第二のアダム」(Ⅰコリ 15:)なるキリストは、死に至るまで従順を貫き、信じる者には双方の木を開放しました。たった一つの実だけ禁じられたのが、たった一つの体だけ食べよと。私たちもいのちと従順に与ります(黙 22:14)。

12 月 13 日

「主によって生きる」

ヨハネ 6:52～59

武安　宏樹　牧師

聖餐式の引用箇所として用いられる箇所ですが、本書は三福音書と異なり、最後の晩餐を扱わず、ユダヤ人の「どうやって？」への返答として語られます。彼らのように真理に対し謙虚さを忘れ、喧々諤々論争するのは空しいことで、「人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、いのちはありません。」要するに、生けるパンを軽蔑し拒絶するあなたがたは、死んでいると主は言われます。「これは、キリストの恵みを軽蔑する全ての人たちに、準備されている復讐で、彼らはその傲慢な思いと一緒に、惨めに滅びてしまうのである。」(ｶﾙｳﾞｧﾝ) 加えてユダヤ人が聖書的に避ける血さえ(申 12:23)、提供すると言われます。「イエスは彼の生命を私たちの心の真中、核心部に取り入れなければならないと意味されたのである」(ﾊﾞｰｸﾚｰ)ここで「食べ」「飲む」(54～57 節)の時制は、、信じた者が現在進行形で、いのちにあふれた生活を継続することを表します。また「食べる」(54～57 節)動詞は前節と異なり、食欲旺盛な動物がバリバリと食べる意です。「永遠のいのち」は地上で享受だけでなく終わりの日の復活に、結びつけられ、主のもとに凱旋する日に知るべき全き救いの前味を表します。

聖餐論争でカルヴァンは、信仰を持って飲食する者のみ聖霊の働きにより、天に用意されている祝宴に与ることができ、「キリストは御自身のいのちを、あたかも骨と髄とに入り込むと言ってよいほどに、我々に移し注ぎたもう」とその恵みを語ります。いや、教会という空間の第一主日の聖礼典に限られず、全地に主が満ちておられるゆえ、「いつでも、どこでも、どんな時でも」与れる!パウロは信者がキリストの肢体に結びつけられながら、御霊の賜物の現れを語りますが(Ｉｺﾘ 12:)、当教会員数 50 が接合のみならず御霊の血が循環して、栄養が回ります。パンのみだと詰まるのが、ぶどう酒を流し込み消化します。最後に肉と血に与る信仰者と主ご自身との位置関係が語られます(56-57 節)。「そこには、信じる者のいのちはキリストのいのちに同化されるのとちょうど同じように、キリストが信じる者の全生命に完全に同化したもうという意味が述べられている」(ﾃﾆｲ)さらに「うちに」だけでなく存在理由と原動力を表す前置詞「よって」は、飲食する度に自分の意義と証し＆奉仕を明らかにします。「永遠に」(58 節)の前置詞は「向かって」の意。斯くの如く生きて活きましょう!

12 月 20 日

「信じない者と離れ去る者」

ヨハネ 6:60～71

武安　宏樹　牧師

主のもとを離れていく人々をどう捉えるか。自分の弱い部分が出て来たり、周囲の空気に飲まれたり、神に近づくのを恐れたりと、要因は様々でしょう。あからさまに批判して出て行く人は少数で、スーッと消える人が大多数です。誰よりも寂しく思われるのは神さまですが、いずれにしても残念なことです。されど主イエスは誰が離れるか知りつつ、愛を貫徹する愚か者となりました。弟子となることに入試や面接は無いでしょうが、家族や仕事を投げうっても、ついていきたいと願う集団でした。きっかけは奇蹟や御言葉など各様ですが、どれだけ主と言葉を交わしたとか奉仕したとかでなく、結局は信頼関係です。本日の箇所を境に弟子の数は減少しますが、それだけ真価が問われるのです。「ひどい」(60 節)とは受け入れ難いの意ですが、聞き手の器が試されています。その中身は旧約とのズレといった知的な葛藤よりも、心の動機のすれ違いが見られます。彼らは救国のヒーローや自分の不幸の克服など期待の大きさが、ひいては裏切られた際の失望の大きさとして、跳ね返ってきたのではないか。ここで悔い改めて動機を修正するには、謙虚さを欠いた彼らには無理でした。

もう一つは宗教指導者たちの圧力など、外圧があったことも要因でしょう。脅しに屈したり、平和な在家信者や隠れキリシタンを志したかも知れません。いずれにしても人間的な懸念が支配して、肉の思いが霊のいのちを塞ぎます。一言で言えば砕かれておらず、これからも砕かれることを拒んだ人々でした。「あなたがたも離れて行きたいのですか」(67 節)は否定詞が使われているので「あなたがたも離れて行きたいと思わないのですか？そうではないですね？」との「いいえ！」の返答を望んでいる強い問いです。鬼気迫る問いかけですが、有無を言わさない圧力をかけるのではなく、あくまでも信仰告白を求めます。「主よ。私たちはだれのところに行けるでしょうか。」素晴らしい告白です。最も知ってほしかった永遠のいのちを受け止めたと、12 名同意したからです。この告白についてM･テニイ博士は、①信仰の持つ排他性、②信仰の不動性、③信仰の完結性の三点から、彼らが経験によって信仰が悟りに先立つことを、告白することで、最初の決意から大きく前進した心の状態を表すと記します。後に全員が挫折を味わうも、告白に応える主は不器用な彼らを再起させます。

12 月 27 日

「三重で芽生えている新しいこと」

イザヤ 43:18～19

全　志碩　師

主は常に新しいことをなさるお方。新しい賛美を喜ばれるお方。(詩 33:3/40:3 他)そんな神様が三重で新しいことを起こされようとしている。そして、それは確実に芽生えている。

いこいのある教会は新しく生み出された開拓教会である。開拓教会であるメリットは、何をしても「初めて」になることが多いということ。なんでも初めて行うことには新しさを感じる。

主が行おうとする新しいこと(19 節)には二つの側面がある。①「Renew」: リニューアルすること。大幅な変更。全面改装。劇的な変化をもたらすことによって新しくされる。②「Repair」: 修繕・修復すること。あるいは、回復すること。古びた箇所を取り替えることで新しくする。小さな変化の積み重ねによって「新しさ(新鮮さ)」を保つこと。

新しいことをなさろうと主に対して、それを妨げるのは私たちの過去への執着。「昔のことに目を留め（18 節)」たままでは新しいことを期待できない。昔のこととは①過去の栄光②過去の失敗③過去の伝統がある。大きな成功は時には後のプレッシャーとなり、失敗に対する恐れを生み出す。逆に大きな失敗は負の心を生み出し、チャレンジすることの弊害となる。伝統は安定をもたらす一方で、時に無意味な形式主義の元となる。

愛宕山教会は 2020 年を通して、どんな新しいことが生み出されただろうか。どのような新しい賛美(働き)を持って、主の福音を述べ伝えて来ただろうか。新しいことを行うのには勇気が要る。エネルギーも要る。でも、主がなさる新しいことは私たちの胸を熱くする。今年の良かったことにも悪かったことにも心を留めず、2021 年を通して主がなさろうとする新しいことに、大いに期待を膨らませつつ、皆が心ひとつに献身しようではないか！